

幾何解析における貼り合わせ技法

2020年10月 東大数理集中講義

松尾 信一郎

名古屋大学大学院多元数理科学研究科

この講義について

講義計画

1. 線型幾何解析での貼り合わせ技法：Riemann-Rochの定理
2. Green核の逐次近似による構成
3. 非線型幾何解析での貼り合わせ技法の頂点：Taubesノルム
4. 倉西写像：Floer-WeinsteinによるSchrodinger方程式の解の構成

オススメ文献

1. Arthur Jaffe and Clifford Henry Taubes, *Vortices and Monopoles*, Birkhauser, 1980.
2. Clifford Henry Taubes, *Metrics, Connections and Gluing Theorems*, AMS, 1996.
3. Thierry Aubin, *Some Nonlinear Problems in Riemannian Geometry*, Springer Monographs in Mathematics, 1998.
4. David Gilbarg and Neil S. Trudinger, *Elliptic Partial Differential Equations of Second Order*, Springer Classics in Mathematics, 2001.

単位について

1. 講義中に出される課題を何題か解いて提出してください。
2. 締切は今年中でよいでしょうか。

Riemann-Rochの定理

1. 目標

目標

Riemann-Rochの定理を示すことで、

- Wittenの局所化の議論
- 近似解から真の解を作る議論の雛形

を学ぶ。つまり、線型幾何解析での貼り合わせの技法を学ぶ。

定理 1.1 (Riemann-Rochの定理 (と調和積分論))

Σ を種数 g の閉Riemann面として、 $L \rightarrow \Sigma$ を正則直線束とする。このとき、

$$\operatorname{ind}_{\mathbb{C}}(\bar{\partial}_L) = \chi(\Sigma, L) = 1 - g + c_1(L)$$

が成り立つ。

以下、Riemann-Rochの定理を、線型幾何解析での貼り合わせの技法によって、実Cauchy-Riemann作用素に対して示す。

参考文献

- Taubesの*Counting pseudo-holomorphic submanifolds in dimension 4*の最後の章。
- 古田先生の「指数定理」の第4.2節。

2. 実Cauchy-Riemann作用素 のRiemann-Rochの定理

実Cauchy-Riemann作用素

Σ を種数 g の閉Riemann面として、 $E \rightarrow \Sigma$ をHermite直線束とする。さらに、

$$F := \overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(T\Sigma, E)$$

とする。 $\Gamma(F) = \Omega^{0,1}(\Sigma, E)$ である。

以後、例えば、 Σ 上のベクトル束 E の切断を $C^\infty(\Sigma; E)$ とも書く。

定義 2.1 (実Cauchy-Riemann作用素)

実線型写像

$$D: C^\infty(\Sigma; E) \rightarrow C^\infty(\Sigma; F)$$

が実Cauchy-Riemann作用素であるとは、任意の $f \in C^\infty(X; \mathbb{R})$ と $u \in C^\infty(\Sigma; E)$ に対して、Leibniz則

$$D(fu) = (\bar{\partial}f)u + f(Du)$$

が成り立つこと。

課題 2.1: 次を示せ。

1. Σ はRiemann面なので、実CR作用素 D が複素線型であって、任意の $f \in C^\infty(X; \mathbb{C})$ に対してLeibniz則が成り立つならば、 E は正則直線束である。
2. 逆に、正則直線束 L のDolbeault作用素 $\bar{\partial}_L$ は、実CR作用素である。

実CR作用素の指数

$E \rightarrow \Sigma$ を Hermite 直線束として, $F := \overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(T\Sigma, E)$ とする. $\Gamma(F) = \Omega^{0,1}(\Sigma, E)$ である. 実CR作用素 $D: C^\infty(\Sigma; E) \rightarrow C^\infty(\Sigma; F)$ は Leibniz 則 $D(fu) = (\bar{\partial}f)u + f(Du)$ を満たす.

定義 2.2 (実CR作用素の指数)

実CR作用素 $D: C^\infty(\Sigma; E) \rightarrow C^\infty(\Sigma; F)$ に対して,

$$\text{ind}_{\mathbb{R}}(D) := \dim_{\mathbb{R}} \text{Ker } D - \dim_{\mathbb{R}} \text{Coker } D$$

と定め, D の指数と呼ぶ. 以後, $\text{ind}_{\mathbb{R}}(D)$ を $\text{ind}(D)$ と書く.

今, Σ は, コンパクトであり, 境界はなかった.

命題 2.3

任意の実CR作用素 $D: C^\infty(\Sigma; E) \rightarrow C^\infty(\Sigma; F)$ に対して, $\text{ind}(D) < \infty$ である.

また, 正則直線束のときは, 次が成り立つ.

命題 2.4 (調和積分論)

$E = L$ が正則直線束かつ $D = \bar{\partial}_L$ が Dolbeault 作用素のとき, $\text{ind}_{\mathbb{R}}(\bar{\partial}_L) = 2\chi(\Sigma, L)$ である.

課題 2.2: これらを示せ.

実CR作用素に対するRiemann-Rochの定理

定理 2.5 (実CR作用素に対するRiemann-Rochの定理)

Σ を種数 g の閉Riemann面として、 $E \rightarrow \Sigma$ をHermite直線束とする。 $F := \overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(T\Sigma, E)$ とする。 E から F への反複素線型束写像の空間を $\overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F)$ とする。 このとき、任意の実CR作用素 $C^\infty(\Sigma, E) \rightarrow C^\infty(\Sigma, F)$ に対して、

$$\text{ind}(D) = c_1(\overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F))$$

が成り立つ。

- $E = L$ が正則直線束かつ $D = \bar{\partial}_L$ がDolbeault作用素のとき、 $\text{ind}_{\mathbb{R}}(\bar{\partial}_L) = 2\chi(\Sigma, L)$ である。
- 次に右辺の $c_1(\overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F))$ を計算してみよう。

$c_1(\overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F))$ の計算

Σ を種数 g の閉Riemann面として, $E \rightarrow \Sigma$ をHermite直線束とする. $F := \overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(T\Sigma, E)$ とする. E から F への反複素線型束写像の空間を $\overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F)$ とする.

$$\text{ind}(D) = c_1(\overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F))$$

右辺の $c_1(\overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F))$ を計算したい.

- $\overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F) = \overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, \mathbb{C}) \otimes F$ であり, Hermite計量により $\overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, \mathbb{C}) = E$ なので,

$$\overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F) = E \otimes F$$

である. よって,

$$c_1(\overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F)) = c_1(E) + c_1(F)$$

である.

- $F = \overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(T\Sigma, E)$ についても, 同様にして,

$$c_1(F) = c_1(T\Sigma) + c_1(E)$$

である.

- $c_1(T\Sigma) = \chi(\Sigma) = 2 - 2g$ だった.

よって,

$$c_1(\overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F)) = 2 - 2g + 2c_1(E)$$

を得る.

今までのまとめ

$$\text{ind}(D) = c_1(\overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F))$$

今までに,

- $E = L$ が正則直線束のとき, Dolbeault作用素 $\bar{\partial}_L$ は実CR作用素である.
- $E = L$ が正則直線束かつ $D = \bar{\partial}_L$ がDolbeault作用素のとき, $\text{ind}_{\mathbb{R}}(\bar{\partial}_L) = 2\chi(\Sigma, L)$ である.
- $c_1(\overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F)) = 2 - 2g + 2c_1(E)$

がわかった. よって, 次を得る.

系 2.6 (Riemann-Rochの定理)

Σ を種数 g の閉Riemann面として, $L \rightarrow \Sigma$ を正則直線束とする. このとき,

$$\chi(\Sigma, L) = 1 - g + c_1(L)$$

が成り立つ.

以後, $\text{ind}(D) = c_1(\overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F))$ を

Wittenの局所化の議論

により示す. そのために, まずは実CR作用素の反複素線型束写像による摂動を考えよう.

3. 実Cauchy-Riemann作用素の摂動

実CR作用素の摂動

$E \rightarrow \Sigma$ をHermite直線束として、 $F := \overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(T\Sigma, E)$ とする。 $\Gamma(F) = \Omega^{0,1}(\Sigma, E)$ である。

実CR作用素 $D: C^\infty(\Sigma; E) \rightarrow C^\infty(\Sigma; F)$ はLeibniz則 $D(fu) = (\bar{\partial}f)u + f(Du)$ を充たす。

E から F への反複素線型束写像の空間を $\overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F)$ とする。

命題 3.1

1. D_1 と D_2 が実CR作用素ならば、 $(D_1 - D_2) \in \text{Hom}_{\mathbb{R}}(E, F)$ である。
2. 逆に、 D が実CR作用素であり、 $V \in \text{Hom}_{\mathbb{R}}(E, F)$ ならば、 $(D + V)$ も実CR作用素である。
3. 任意の実CR作用素 D に対して、複素線型CR作用素 D_0 と束写像 $A \in \overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F)$ が存在して、 $D = D_0 + A$ を充たす。

今、 Σ は、コンパクトであり、境界はなかった。

命題 3.2

任意の実CR作用素 D と任意の $V \in \text{Hom}_{\mathbb{R}}(E, F)$ に対して、

$$\text{ind}(D) = \text{ind}(D + V)$$

である。すなわち、実CR作用素の指数は実線型束写像による摂動で安定である。

課題 3.1: これらを示せ。

Wittenの局所化の議論の流れ

$E \rightarrow \Sigma$ をHermite直線束として、 $F := \overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(T\Sigma, E)$ とする。 $\Gamma(F) = \Omega^{0,1}(\Sigma, E)$ である。

実CR作用素 $D: C^\infty(\Sigma; E) \rightarrow C^\infty(\Sigma; F)$ はLeibniz則 $D(fu) = (\bar{\partial}f)u + f(Du)$ を充たす。

E から F への反複素線型束写像の空間を $\overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F)$ とする。

- D が実CR作用素であり、 $V \in \text{Hom}_{\mathbb{R}}(E, F)$ ならば、 $(D + V)$ も実CR作用素である。
- さらに、 D が実CR作用素であり、 $V \in \text{Hom}_{\mathbb{R}}(E, F)$ ならば、 $\text{ind}(D) = \text{ind}(D + V)$ である。

$$\text{ind}(D) = c_1(\overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F))$$

さて、

- $c_1(\overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F))$ を計算するためには、零切断と横断的な $V \in \overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F)$ に対して、 V の零点の個数を符号付きで数え上げればよい。
- また、このとき、指数の安定性より、 $\text{ind}(D + V) = \text{ind}(D)$ である。

よって、 $\text{ind}(D) = c_1(\overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F))$ を示すためには、

零切断と横断的な $V \in \overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F)$ に対して、 V の零点の符号付き個数と $\text{ind}(D + V)$ が等しいこと

を示せばよい。これがWittenの局所化の議論である。

まずは $\Sigma = \mathbb{T}^2$ かつ E が自明束 $\underline{\mathbb{C}}$ のときにどうなるかを見てみよう。

4. トーラスかつ自明束のとき

トラスかつ自明束のときのRiemann-Rochの定理

$$\text{ind}(D) = c_1(\overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F))$$

- $\Sigma = \mathbb{T}^2$ とする. $T\Sigma = \underline{\mathbb{C}} := \Sigma \times \mathbb{C}$ である.
- $E = \underline{\mathbb{C}}$ とする. $F := \overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(T\Sigma, E) = \underline{\mathbb{C}}$ である.
- $\overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F) = \underline{\mathbb{C}}$ である.
- このとき, Dolbeault作用素

$$D := \bar{\partial} = \frac{\partial}{\partial s} + i \frac{\partial}{\partial t} : C^\infty(\mathbb{T}^2; \mathbb{C}) \rightarrow C^\infty(\mathbb{T}^2; \mathbb{C})$$

は実CR作用素である.

課題 4.1 : $\dim \text{Ker}(D) = \dim \text{Coker}(D) = 1$ である.

よって,

$$\text{ind}(D) = \dim \text{Ker}(\bar{\partial}) - \dim \text{Coker}(\bar{\partial}) = 1 - 1 = 0$$

である. また,

$$c_1(\overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F)) = c_1(\underline{\mathbb{C}}) = 0$$

である. よって, $\Sigma = \mathbb{T}^2$ かつ $E = \underline{\mathbb{C}}$ のとき, RRの定理は確かに成り立っている.

では, Wittenの局所化の議論により $0 = 0$ を示してみよう.

$D = \bar{\partial}$ の摂動

$$D := \bar{\partial} = \frac{\partial}{\partial s} + i \frac{\partial}{\partial t} : C^\infty(\mathbb{T}^2; \mathbb{C}) \rightarrow C^\infty(\mathbb{T}^2; \mathbb{C})$$

函数 $\beta : \mathbb{T}^2 \rightarrow \mathbb{C}$ と実数 $m > 0$ に対して, 新しい実CR作用素 $D_m : C^\infty(\mathbb{T}^2; \mathbb{C}) \rightarrow C^\infty(\mathbb{T}^2; \mathbb{C})$ を,

$$D_m u := D u + m \beta \bar{u} = \bar{\partial} u + m \beta \bar{u}$$

と定める.

課題 4.2 : D_m が実CR作用素であることを確認せよ.

指数の安定性より, $\text{ind}(D_m) = \text{ind}(D)$ であった.

適切な β と m を選ぶことにより, $\text{ind}(D_m) = 0$ を示したい. そのために必要なのが Weitzenböck 公式である. さらにその準備として, 形式的共役作用素について復習しておく.

D_m の形式的共役作用素

$$D := \bar{\partial} = \frac{\partial}{\partial s} + i \frac{\partial}{\partial t} : C^\infty(\mathbb{T}^2; \mathbb{C}) \rightarrow C^\infty(\mathbb{T}^2; \mathbb{C})$$

函数 $\beta : \mathbb{T}^2 \rightarrow \mathbb{C}$ と実数 $m > 0$ に対して,

$$D_m u := D u + m \beta \bar{u} = \bar{\partial} u + m \beta \bar{u}$$

と定めた.

このとき, D_m の形式的共役作用素 $D_m^* : C^\infty(\mathbb{T}^2; \mathbb{C}) \rightarrow C^\infty(\mathbb{T}^2; \mathbb{C})$ は,

$$D_m^* \alpha = -\partial \alpha + m \beta \bar{\alpha}$$

である. 特に, $m = 0$ のとき, $D^* = -\partial$ である.

すなわち, 任意の $u, \alpha \in C^\infty(\mathbb{T}^2; \mathbb{C})$ に対して,

$$\int_{\Sigma} (D_m u, \alpha) d\mu = \int_{\Sigma} (u, D_m^* \alpha) d\mu$$

が成り立つ. 特に, 任意の $u \in C^\infty(\mathbb{T}^2; \mathbb{C})$ に対して,

$$\int_{\Sigma} |D_m u|^2 d\mu = \int_{\Sigma} (D_m u, D_m u) d\mu = \int_{\Sigma} (D_m^* D_m u, u) d\mu$$

が成り立つ. また, $\dim \text{Coker } D_m = \dim \text{Ker } D_m^*$ である.

課題 4.3: これらを示せ.

Dolbeault作用素に対するWeitzenbock公式

函数 $\beta : \mathbb{T}^2 \rightarrow \mathbb{C}$ と実数 $m > 0$ に対して,

$$D_m u := D u + m \beta \bar{u} = \bar{\partial} u + m \beta \bar{u}$$

$$D_m^* \alpha = -\partial \alpha + m \beta \bar{\alpha}$$

だった。

定理 4.1 (Dolbeault作用素に対するWeitzenbock公式)

任意の $u \in C^\infty(\mathbb{T}^2; \mathbb{C})$ に対して,

$$D_m^* D_m u = D^* D u + m^2 |\beta|^2 u - m(\partial \beta) \bar{u}$$

が成り立つ。

(証明) 計算すればよい。

$$\begin{aligned} D_m^* D_m u &= D_m^* (\bar{\partial} u + m \beta \bar{u}) \\ &= -\partial (\bar{\partial} u + m \beta \bar{u}) + m \beta (\overline{\bar{\partial} u + m \beta \bar{u}}) \\ &= -\partial (\bar{\partial} u + m \beta \bar{u}) + m \beta (\partial \bar{u} + m \bar{\beta} u) \\ &= -\partial \bar{\partial} u + m^2 |\beta|^2 u + m(-\partial(\beta \bar{u}) + \beta(\partial \bar{u})) \\ &= -\partial \bar{\partial} u + m^2 |\beta|^2 u + m(-(\partial \beta) \bar{u} - \beta(\partial \bar{u}) + \beta(\partial \bar{u})) \\ &= D^* D u + m^2 |\beta|^2 u - m(\partial \beta) \bar{u} \end{aligned}$$

Weitzenböck公式の系

$$D_m^* D_m u = D^* D u + m^2 |\beta|^2 u - m(\partial\beta)\bar{u}$$

系 4.2

任意の $u \in C^\infty(\mathbb{T}^2; \mathbb{C})$ に対して,

$$\int_{\Sigma} |D_m u|^2 d\mu \geq m^2 \int_{\Sigma} |\beta|^2 |u|^2 d\mu - m \|\partial\beta\|_{\infty} \int_{\Sigma} |u|^2 d\mu$$

が成り立つ.

(証明) これも計算すればよい.

$$\begin{aligned} \int_{\Sigma} |D_m u|^2 d\mu &= \int_{\Sigma} (u, D_m^* D_m u) d\mu \\ &= \int_{\Sigma} |D u|^2 d\mu + m^2 \int_{\Sigma} |\beta|^2 |u|^2 d\mu - m \int_{\Sigma} (\partial\beta) |u|^2 d\mu \\ &\geq m^2 \int_{\Sigma} |\beta|^2 |u|^2 d\mu - m \int_{\Sigma} (\partial\beta) |u|^2 d\mu \\ &\geq m^2 \int_{\Sigma} |\beta|^2 |u|^2 d\mu - m \|\partial\beta\|_{\infty} \int_{\Sigma} |u|^2 d\mu \end{aligned}$$

ここまでは任意の摂動項 $\beta: \mathbb{T}^2 \rightarrow \mathbb{C}$ について成り立つことだった. 次に, 特別な β を選ぼう.

特別な摂動項 β

- $\Sigma = \mathbb{T}^2$ かつ $T\Sigma = \underline{\mathbb{C}} := \Sigma \times \mathbb{C}$ だった。
- $E = \underline{\mathbb{C}}$ かつ $F := \overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(T\Sigma, E) = \underline{\mathbb{C}}$ だった。
- $\overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F) = \underline{\mathbb{C}}$ だった。
- 函数 $\beta: \mathbb{T}^2 \rightarrow \mathbb{C}$ と実数 $m > 0$ に対して,

$$D_m u := Du + m\beta\bar{u} = \bar{\partial}u + m\beta\bar{u}$$
$$D_m^* \alpha = -\bar{\partial}\alpha + m\beta\alpha$$

だった。

以後、摂動項 $\beta: \mathbb{T}^2 \rightarrow \mathbb{C}$ は**零点がない**と仮定する。

ここに、 $\Sigma = \mathbb{T}^2$ かつ $E = \underline{\mathbb{C}}$ という仮定を使っている！

すなわち、零点がない β は、 $\overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F) = \underline{\mathbb{C}}$ の切断であって、零切断と横断的なものを定める。

さて、 β に零点がなく、 Σ はコンパクトなので、 $C > 0$ が存在して、任意の $x \in \Sigma$ に対して、

$$|\beta(x)| \geq C$$

を充たす。

Weitzenböck公式と特別な摂動項 β

$$\int_{\Sigma} |D_m u|^2 d\mu \geq m^2 \int_{\Sigma} |\beta|^2 |u|^2 d\mu - m \|\partial\beta\|_{\infty} \int_{\Sigma} |u|^2 d\mu$$
$$|\beta|^2 \geq C^2$$

系 4.3

任意の $u \in C^{\infty}(\mathbb{T}^2; \mathbb{C})$ に対して,

$$\int_{\Sigma} |D_m u|^2 d\mu \geq m(mC^2 - \|\partial\beta\|_{\infty}) \int_{\Sigma} |u|^2 d\mu$$

が成り立つ。

(証明)

$$\begin{aligned} \int_{\Sigma} |D_m u|^2 d\mu &\geq m^2 \int_{\Sigma} |\beta|^2 |u|^2 d\mu - m \|\partial\beta\|_{\infty} \int_{\Sigma} |u|^2 d\mu \\ &\geq m^2 C^2 \int_{\Sigma} |u|^2 d\mu - m \|\partial\beta\|_{\infty} \int_{\Sigma} |u|^2 d\mu \\ &= m(mC^2 - \|\partial\beta\|_{\infty}) \int_{\Sigma} |u|^2 d\mu \end{aligned}$$

Wittenの局所化

$$|\beta|^2 \geq C^2$$

$$\int_{\Sigma} |D_m u|^2 d\mu \geq m(mC^2 - \|\partial\beta\|_{\infty}) \int_{\Sigma} |u|^2 d\mu$$

定理 4.4 (Wittenの局所化)

定数 $m_0 > 0$ が存在して、任意の $m \geq m_0$ に対して、 $\text{Ker } D_m = \{0\}$ である。

(証明) m は、 $mC^2 - \|\partial\beta\|_{\infty} \geq 1/2$ を満たすくらい大きいとせよ。

$D_m u = 0$ とする。このとき、Weitzenböck公式と β の零点の仮定から得られる不等式より、

$$\begin{aligned} 0 &= \int_{\Sigma} |D_m u|^2 d\mu \geq m(mC^2 - \|\partial\beta\|_{\infty}) \int_{\Sigma} |u|^2 \\ &\geq m \cdot \frac{1}{2} \cdot \int_{\Sigma} |u|^2 \geq 0 \end{aligned}$$

が成り立つ。よって、 $u = 0$ である。

課題 4.4: 同様の議論により、 $m \gg 0$ に対して $\text{Ker } D_m^* = \{0\}$ を示せ。

従って、 $m \gg 0$ のとき、 $\text{Ker } D_m = \{0\}$ かつ $\text{Coker } D_m = \{0\}$ がわかった。すなわち、 $m \gg 0$ のとき、 D_m は可逆であり、 $\text{ind}(D_m) = 0$ よりも強いことが示されている。

$\Sigma = \mathbb{T}^2$ かつ $E = \mathbb{C}$ のときのRiemann-Rochの定理

Weitzenbock公式

$$\int_{\Sigma} |D_m u|^2 d\mu \geq m^2 \int_{\Sigma} |\beta|^2 |u|^2 d\mu - m \|\partial\beta\|_{\infty} \int_{\Sigma} |u|^2 d\mu$$

に対して、 $\overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F) = \mathbb{C}$ の零切断に横断的な摂動項 β が充たす不等式

$$|\beta|^2 \geq C^2$$

を組み合わせて、不等式

$$\int_{\Sigma} |D_m u|^2 d\mu \geq m(mC^2 - \|\partial\beta\|_{\infty}) \int_{\Sigma} |u|^2 d\mu$$

を得た。その結果として、

$$m \gg 0 \text{のとき, } \text{Ker } D_m = \{0\} \text{かつ } \text{Coker } D_m = \{0\}$$

がわかった。これをまとめて、

定理 4.5 ($\Sigma = \mathbb{T}^2$ かつ $E = \mathbb{C}$ のときのRiemann-Rochの定理)

$$\text{ind}(\bar{\partial}) = \text{ind}(D_m) = 0$$

を得る。確かに $0 = 0$ であった。

Weitzenbock公式とClifford代数の実表現

Weitzenbock公式

$$D_m^* D_m u = D^* D u + m^2 |\beta|^2 u - m(\partial\beta)\bar{u}$$

の証明を反省するに、摂動

$$u \mapsto m\beta\bar{u}$$

が反複素線型写像であることは、 $\partial\bar{u}$ の項が打ち消し合うために本質的に必要であった。

$$\begin{aligned} D_m^* D_m u &= D_m^* (\bar{\partial}u + m\beta\bar{u}) \\ &= -\partial(\bar{\partial}u + m\beta\bar{u}) + m\beta(\overline{\bar{\partial}u + m\beta\bar{u}}) \\ &= -\partial(\bar{\partial}u + m\beta\bar{u}) + m\beta(\partial\bar{u} + m\bar{\beta}u) \\ &= -\partial\bar{\partial}u + m^2|\beta|^2u + m(-\partial(\beta\bar{u}) + \beta(\partial\bar{u})) \\ &= -\partial\bar{\partial}u + m^2|\beta|^2u + m(-(\partial\beta)\bar{u} - \beta(\partial\bar{u}) + \beta(\partial\bar{u})) \\ &= D^* D u + m^2|\beta|^2u - m(\partial\beta)\bar{u} \end{aligned}$$

その背景には、Clifford代数 $Cl(\mathbb{R}^2)$ の実表現がある。すなわち、 $C: \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{C}$ を複素共役写像とするとき、

$$\left\{ \begin{pmatrix} 0 & -x + iy \\ x + iy & 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 & \beta C \\ \beta C & 0 \end{pmatrix} \right\} = 0$$

が成り立つ。詳しくは、古田先生の教科書の補題4.19とその周辺を見よ。

5. 一般のとき

設定の復習

- Σ を種数 g の閉Riemann面として, $E \rightarrow \Sigma$ をHermite直線束とする. $F := \overline{\text{Hom}_{\mathbb{C}}(T\Sigma, E)}$ とする. E から F への反複素線型束写像の空間を $\overline{\text{Hom}_{\mathbb{C}}(E, F)}$ とする.
- 実CR作用素 $D: C^\infty(\Sigma; E) \rightarrow C^\infty(\Sigma; F)$ はLeibniz則 $D(fu) = (\bar{\partial}f)u + f(Du)$ を充たす.
- このとき, 任意の実CR作用素 $D: C^\infty(\Sigma, E) \rightarrow C^\infty(\Sigma, F)$ に対して,

$$\text{ind}(D) = c_1(\overline{\text{Hom}_{\mathbb{C}}(E, F)})$$

を示したい.

$D: C^\infty(\Sigma, E) \rightarrow C^\infty(\Sigma, F)$ を実CR作用素とする. $\beta \in C^\infty(\Sigma; \overline{\text{Hom}_{\mathbb{C}}(E, F)})$ とする.
このとき, 任意の $m > 0$ に対して, 新しい実CR作用素 $D_m: C^\infty(\Sigma; E) \rightarrow C^\infty(\Sigma; F)$ を,

$$D_m u := Du + m\beta(\bar{u})$$

と定める.

さて, $\text{ind}(D_m) = \text{ind}(D)$ であった. 零切断と横断的に交わる β に対して, $m \gg 0$ のとき,

$$\text{ind}(D_m) \text{と } \beta \text{の零点の符号付き個数が等しいこと}$$

を示したい.

まずは任意の β について成り立つWeitzenbock公式を調べておこう.

Weitzenbock公式

$D: C^\infty(\Sigma, E) \rightarrow C^\infty(\Sigma, F)$ を実CR作用素とする。

任意の $\beta \in C^\infty(\Sigma; \text{Hom}_{\mathbb{C}}(\bar{E}, F))$ と $m > 0$ に対して、 $D_m u := Du + m\beta(\bar{u})$ とした。

定理 5.1 (積分型のWeitzenbock公式)

$\beta \in C^\infty(\Sigma; \text{Hom}_{\mathbb{C}}(\bar{E}, F))$ かつ $m > 0$ とする。任意の $u \in C^\infty(\Sigma; E)$ に対して、

$$\int_{\Sigma} |D_m u|^2 d\mu = \int_{\Sigma} |Du|^2 d\mu + m^2 \int_{\Sigma} |\beta(u)|^2 d\mu - m \int_{\Sigma} (u, (\partial\beta)(\bar{u})) d\mu$$

が成り立つ。

系 5.2

$$\int_{\Sigma} |D_m u|^2 d\mu \geq m^2 \int_{\Sigma} |\beta(u)|^2 d\mu - m \|\partial\beta\|_{\infty} \int_{\Sigma} |u|^2 d\mu$$

Weitzenbock公式を示すときに、 $\text{rank}_{\mathbb{C}}(E) = 1$ のときの特殊事情

$$\overline{\beta^\dagger} = \beta$$

が使われる。

課題 5.1: これらを示せ。また、高階ベクトル束でのWeitzenbock公式の障碍を考察せよ。

次に、零切断と横断的な摂動項 β を考えよう。

零切断と横断的な摂動項 β

$D: C^\infty(\Sigma; E) \rightarrow C^\infty(\Sigma; F)$ を実CR作用素とする。 $\beta \in \overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(\bar{E}, F)$ とする。

$\Sigma = \mathbb{T}^2$ かつ $E = \mathbb{C}$ のとき、 $\overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(\bar{E}, F)$ も自明なので、 β には零点がないと仮定できた。

一般のとき、 β には零点があるかもしれないが、次のように仮定することはできる。

β の各零点 $p \in \Sigma$ に対して、 p を中心とする Σ の局所座標系

$$\Sigma \supset U_p \longrightarrow \mathbb{D} := \{|z| < 1\} \subset \mathbb{C}$$

と U_p での E の自明化が存在して、

| | | |
|----------------|-----------------------|---|
| Σ の複素構造 | \longleftrightarrow | $i = \sqrt{-1}$ 倍 |
| $d\mu$ | \longleftrightarrow | Lebesgue測度 $ds dt$ |
| D | \longleftrightarrow | $\bar{\partial} = \partial_s + i\partial_t$ |
| β | \longleftrightarrow | z 倍か \bar{z} 倍 |

と仮定する。さらに、 $p \neq q$ のとき、 $U_p \cap U_q = \emptyset$ と仮定する。以後、これらを固定する。

課題 5.2: このような D と β と局所座標と自明化の存在を示せ。

さて、 Σ はコンパクトなので、 $C > 0$ が存在して、任意の $x \in \Sigma \setminus (\cup U_p)$ に対して、

$$|\beta(x)| \geq C$$

を充たす。

エネルギーの局在化についての予備的考察

$$\int_{\Sigma} |D_m u|^2 d\mu \geq m^2 \int_{\Sigma} |\beta(u)|^2 d\mu - m \|\partial\beta\|_{\infty} \int_{\Sigma} |u|^2 d\mu$$

$\beta \longleftrightarrow z \text{倍か} \bar{z} \text{倍 on } U_p$
 $|\beta|^2 \geq C^2 \text{ on } \Sigma \setminus (\cup U_p)$

このとき、

$$\begin{aligned} \int_{\Sigma} |D_m u|^2 d\mu &\geq m^2 \int_{\Sigma} |\beta(u)|^2 d\mu - m \|\partial\beta\|_{\infty} \int_{\Sigma} |u|^2 d\mu \\ &\geq m^2 \int_{\Sigma \setminus \cup U_p} |\beta(u)|^2 d\mu - m \|\partial\beta\|_{\infty} \int_{\Sigma} |u|^2 d\mu \\ &\geq m^2 C^2 \int_{\Sigma \setminus \cup U_p} |u|^2 d\mu - m \|\partial\beta\|_{\infty} \int_{\Sigma} |u|^2 d\mu \end{aligned}$$

より、 $D_m u = 0$ ならば、

$$\int_{\Sigma \setminus \cup U_p} |u|^2 d\mu \leq \frac{\|\partial\beta\|_{\infty}}{m C^2} \int_{\Sigma} |u|^2 d\mu$$

が成り立つ。すなわち、 $m \gg 0$ のとき、 $\text{Ker } D_m$ の元は β の零点の近くに局在化している。

次に、この考察をさらに精密にしよう。

バブル解析の第一歩： β の零点の周りでのスケール変換

$$\Sigma \supset U_p \longrightarrow \mathbb{D} := \{|z| < 1\} \subset \mathbb{C}$$
$$(Du + m\beta u) \longleftrightarrow (\bar{\partial}u + mz \cdot \bar{u}) \text{ or } (\bar{\partial}u + m\bar{z} \cdot \bar{u}) \text{ on } U_p$$

$Z_+(\beta)$ を z 倍に対応する β の零点の集合として、 $Z_-(\beta)$ を \bar{z} 倍に対応する β の零点の集合とする。
さらに、 $Z(\beta) = Z_+(\beta) \sqcup Z_-(\beta)$ を β の零点の集合とする。

$r > 0$ に対して、 $\mathbb{D}(\sqrt{r}) := \{z \in \mathbb{C} \mid |z| < \sqrt{r}\}$ とする。

$p \in Z(\beta)$ かつ $m > 0$ とする。任意の $u \in C^\infty(\Sigma; E)$ に対して、函数 $u_{(p,m)}: \mathbb{D}(\sqrt{r}) \rightarrow \mathbb{C}$ を、

$$u_{(p,m)}(z) := \frac{1}{\sqrt{m}} u\left(\frac{z}{\sqrt{m}}\right)$$

により定める。

特に、 $D_m u = 0$ ならば、 $p \in Z_+(\beta)$ か $p \in Z_-(\beta)$ に従い、 $\mathbb{D}(\sqrt{m})$ 上で

$$\bar{\partial}u_{(p,m)} + z \cdot \overline{u_{(p,m)}} = 0 \quad \text{か} \quad \bar{\partial}u_{(p,m)} + \bar{z} \cdot \overline{u_{(p,m)}} = 0$$

のどちらかを満たす。

課題 5.3： これを示せ。

バブルの抽出

$$\begin{aligned} (Du + m\beta u) &\longleftrightarrow (\bar{\partial}u + mz \cdot \bar{u}) \text{ or } (\bar{\partial}u + m\bar{z} \cdot \bar{u}) \text{ on } U_p \\ u_{(p,m)}(z) &:= u(z/\sqrt{m})/\sqrt{m} \\ \bar{\partial}u_{(p,m)} + z \cdot \overline{u_{(p,m)}} &= 0 \quad \text{か} \quad \bar{\partial}u_{(p,m)} + \bar{z} \cdot \overline{u_{(p,m)}} = 0 \end{aligned}$$

定理 5.3

任意の発散する実数列 $m_j \rightarrow \infty$ と切断の列 $u_j \in \Gamma(E)$ に対して、 $D_{m_j} u_j = 0$ かつ $\|u_j\|_2 = 1$ ならば、部分列を取るにより、任意の零点 $p \in Z(\beta)$ に対して、滑らかな函数 $u_p \in C^\infty(\mathbb{C}; \mathbb{C})$ が存在して、

- スケール変換 $(u_j)_{(p,m_j)}: \mathbb{D}(\sqrt{m}) \rightarrow \mathbb{C}$ は、 $u_p: \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{C}$ に、 C_{loc}^∞ 収束する。
- $p \in Z_+(\beta)$ か $p \in Z_-(\beta)$ に従い、

$$\bar{\partial}u_p + z \cdot \overline{u_p} = 0 \quad \text{か} \quad \bar{\partial}u_p + \bar{z} \cdot \overline{u_p} = 0$$

のどちらかを満たす。

- $\sum_{p \in Z(\beta)} \int_{\mathbb{C}} |u_p|^2 ds dt = 1$

課題 5.4: 不等式 $\int_{\Sigma \cup U_p} |u|^2 d\mu \leq \frac{\|\partial\beta\|_\infty}{mC^2} \int_{\Sigma} |u|^2 d\mu$ を用いて、この定理を示せ。

バブルについて

$$\bar{\partial}u_p + z \cdot \bar{u}_p = 0 \quad \text{か} \quad \bar{\partial}u_p + \bar{z} \cdot \bar{u}_p = 0$$

定理 5.4

滑らかな函数 $u: \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{C}$ が,

$$\bar{\partial}u + \bar{z} \cdot \bar{u} = 0 \quad \text{かつ} \quad \int_{\mathbb{C}} |u|^2 \, ds dt < \infty$$

を充たすならば, $u \equiv 0$ である.

(証明) 一般に, $\Delta|u|^2 = 2 \operatorname{Re}\langle u, \Delta u \rangle - 2|\nabla u|^2$ である. また, $\bar{\partial}u + \bar{z} \cdot \bar{u} = 0$ によって,

$$\Delta u = -\partial \bar{\partial} u = -\partial(-\bar{z} \cdot \bar{u}) = \bar{z}(\partial \bar{u}) = \bar{z} \cdot \overline{\bar{\partial} u} = \bar{z} \cdot \overline{-\bar{z} \cdot \bar{u}} = -|z|^2 u$$

である. よって,

$$\Delta|u|^2 = 2 \operatorname{Re}\langle u, \Delta u \rangle - 2|\nabla u|^2 = 2 \operatorname{Re}\langle u, -|z|^2 u \rangle - 2|\nabla u|^2 = -2|z|^2|u|^2 - 2|\nabla u|^2$$

を得る. 特に, $\Delta|u|^2 \leq 0$ である. 従って, 平均値の定理と仮定より, 任意の $x \in \mathbb{C}$ に対して,

$$|u(x)|^2 \leq \frac{1}{\pi r^2} \int_{|z-x|<r} |u(z)|^2 \, ds dt \leq \frac{1}{\pi r^2} \int_{\mathbb{C}} |u|^2 \, ds dt \xrightarrow{r \rightarrow \infty} 0$$

が成り立つ.

バブルについて

$$\bar{\partial}u_p + z \cdot \bar{u}_p = 0 \quad \text{か} \quad \bar{\partial}u_p + \bar{z} \cdot \bar{u}_p = 0$$

定理 5.5

滑らかな函数 $u: \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{C}$ が,

$$\bar{\partial}u + z \cdot \bar{u} = 0 \quad \text{かつ} \quad \int_{\mathbb{C}} |u|^2 \, ds dt < \infty$$

を充たすならば、実数 $k \in \mathbb{R}$ が存在して、 $u = ke^{-|z|^2/2}$ である。

(証明) まずは u が実数値であることを示す。
 $\bar{\partial}u + z \cdot \bar{u} = 0$ によって、

$$\Delta u = -\partial \bar{\partial}u = -|z|^2 u + 2\bar{u}$$

である。従って、 $f := \text{Im } u: \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{R}$ は、

$$\Delta f = -(|z|^2 + 2)f \quad \text{かつ} \quad \int_{\mathbb{C}} |f|^2 \, ds dt < \infty$$

を充たす。よって、

$$\Delta f^2 = 2\langle f, \Delta f \rangle - 2|\nabla f|^2 \leq 0$$

である。

従って、平均値の定理より、 $f = \text{Im } u \equiv 0$ を得る。

さて、 $u_0(z) := e^{-|z|^2/2}: \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{R}$ は解である。そこで、 $v(z) := u(z)/u_0(z)$ とすれば、

$$\bar{\partial}v = \bar{\partial}(u(z)e^{|z|^2/2}) = 0$$

を得る。従って、 v は、実数値整函数なので、定数である。

バブルについて

$$\bar{\partial}u_p + z \cdot \bar{u}_p = 0 \quad \text{か} \quad \bar{\partial}u_p + \bar{z} \cdot \bar{u}_p = 0$$

滑らかな函数 $u: \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{C}$ が,

$$\bar{\partial}u + \bar{z} \cdot \bar{u} = 0 \quad \text{かつ} \quad \int_{\mathbb{C}} |u|^2 ds dt < \infty$$

を充たすならば, $u \equiv 0$ である.

滑らかな函数 $u: \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{C}$ が,

$$\bar{\partial}u + z \cdot \bar{u} = 0 \quad \text{かつ} \quad \int_{\mathbb{C}} |u|^2 ds dt < \infty$$

を充たすならば, 実数 $k \in \mathbb{R}$ が存在して, $u = ke^{-|z|^2/2}$ である.

Wittenの局所化

定理 5.6

定数 $m_0 > 0$ が存在して、任意の $m \geq m_0$ に対して、 $\dim \text{Ker} D_m \leq \#Z_+(\beta)$ である。

証明は背理法による。今までに示した次の定理を用いる。

任意の $m_j \rightarrow \infty$ と $u_j \in \Gamma(E)$ に対して、 $D_{m_j} u_j = 0$ かつ $\|u_j\|_2 = 1$ ならば、部分列を取ることにより、任意の $p \in Z(\beta)$ に対して、 $u_p \in C^\infty(\mathbb{C}; \mathbb{C})$ が存在して、

- スケール変換

$$(u_j)_{(p, m_j)} : \mathbb{D}(\sqrt{m}) \rightarrow \mathbb{C}$$

は、 $u_p : \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{C}$ に、 C_{loc}^∞ 収束する。

- $p \in Z_+(\beta)$ か $p \in Z_-(\beta)$ に従い、

$$\bar{\partial} u_p + z \cdot \bar{u}_p = 0 \quad \text{か} \quad \bar{\partial} u_p + \bar{z} \cdot \bar{u}_p = 0$$

- $$\sum_{p \in Z(\beta)} \int_{\mathbb{C}} |u_p|^2 ds dt = 1$$

滑らかな函数 $u : \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{C}$ が、

$$\bar{\partial} u + \bar{z} \cdot \bar{u} = 0 \quad \text{かつ} \quad \int_{\mathbb{C}} |u|^2 ds dt < \infty$$

を充たすならば、 $u \equiv 0$ である。

滑らかな函数 $u : \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{C}$ が、

$$\bar{\partial} u + z \cdot \bar{u} = 0 \quad \text{かつ} \quad \int_{\mathbb{C}} |u|^2 ds dt < \infty$$

を充たすならば、実数 $k \in \mathbb{R}$ が存在して、 $u = k e^{-|z|^2/2}$ である。

Wittenの局所化

定数 $m_0 > 0$ が存在して、任意の $m \geq m_0$ に対して、 $\dim \text{Ker } D_m \leq \#Z_+(\beta)$ である。

(証明) 背理法による。 $N := \#Z_+(\beta) + 1$ とする。

発散する列 $m_j \rightarrow \infty$ と切断の列の組 $\{u_{j,1}, \dots, u_{j,N}\}$ が存在して、

- 各 $j = 1, 2, 3, \dots$ と各 $k = 1, \dots, N$ に対して、 $D_{m_j} u_{j,k} = 0$ かつ $\|u_{j,k}\|_2 = 1$ であり、
- 各 $j = 1, 2, 3, \dots$ に対して、 $\{u_{j,1}, \dots, u_{j,N}\}$ は一次独立である

と仮定する。このとき、スケール変換を考えることにより、各点 $p \in Z(\beta)$ に対して、 \mathbb{C} 上の関数の組 $\{u_{p,1}, \dots, u_{p,N}\}$ が存在して、

- $p \in Z_+(\beta)$ か $p \in Z_-(\beta)$ に従い、 $\bar{\partial} u_p + z \cdot \overline{u_p} = 0$ か $\bar{\partial} u_p + \bar{z} \cdot \overline{u_p} = 0$ を充たし、
- 各 $k = 1, \dots, N$ に対して、 $\sum_{p \in Z(\beta)} \|u_{p,k}\|_2 = 1$ であって、さらに、
- $k \neq \ell$ のとき、 $\sum_{p \in Z(\beta)} \langle u_{p,k}, u_{p,\ell} \rangle = 0$ もわかる。

従って、 $\{u_{p,1}, \dots, u_{p,N}\}$ は、 $(L^2(\mathbb{C}; \mathbb{C}))^{\#Z(\beta)}$ 中の N 次元部分空間を定める。

しかし、 $p \in Z_-(\beta)$ のとき、任意の $k = 1, \dots, N$ に対して、 $u_{p,k} \equiv 0$ である。これは矛盾。

課題 5.5: エネルギーの局所化を用いて $\{u_{j,1}, \dots, u_{j,N}\}$ が一次独立であることを示せ。

線型貼り合わせ

定数 $m_0 > 0$ が存在して、任意の $m \geq m_0$ に対して、 $\dim \text{Ker } D_m \leq \#Z_+(\beta)$ である。

次は、 $\dim \text{Ker } D_m \geq \#Z_+(\beta)$ を示したい。すなわち、 $\text{Ker } D_m$ の元をたくさん作らねばならない。そのために使われるのが、

Taubes の貼り合わせ技法 (の線型版)

である。

今までにやったことは、

1. $D_{m_j} u_j = 0$ という Σ 上の解の列
2. スケール変換
3. \mathbb{C} 上の極限関数 (バブル) の抽出

ということ。

Taubes の貼り合わせ技法では、逆に、 \mathbb{C} 上のバブルから Σ 上の解を構成する。このとき、バブルが局在化しているということが大切である。

1. \mathbb{C} 上のバブル
2. Σ 上の近似解の構成
3. 真の解への摂動

近似解の構成

まずは、 \mathbb{C} 上の解を Σ に移植して近似解を構成する。 β の零点の周りの座標系 $\{U_p\}$ は固定されている。

$$\begin{aligned}\Sigma \supset U_p &\longrightarrow \mathbb{D} := \{|z| < 1\} \subset \mathbb{C} \\ (Du + m\beta u) &\longleftrightarrow (\bar{\partial}u + mz \cdot \bar{u}) \text{ or } (\bar{\partial}u + m\bar{z} \cdot \bar{u}) \text{ on } U_p \\ u_{(p,m)}(z) &:= u(z/\sqrt{m})/\sqrt{m}\end{aligned}$$

滑らかなカットオフ関数 $\gamma: \mathbb{D} \rightarrow [0, 1]$ であって、

$$\gamma|_{\mathbb{D}(1/2)} \equiv 1 \quad \text{かつ} \quad \gamma|_{\mathbb{D} \setminus \mathbb{D}(3/4)} \equiv 0$$

を充たすものをとる。

$m > 0$ とする。

各零点 $p \in Z_+(\beta)$ を考えると、座標近傍 $U_p \subset \Sigma$ と $\mathbb{D} \subset \mathbb{C}$ の同一視の下で、任意のパラメータ $k_p \in \mathbb{R}$ に対して、

$$\gamma(z)(k_p \cdot \sqrt{m}e^{-m|z|^2/2})$$

は、 Σ 上の E の切断を定める。従って、近似解写像

$$\Phi_m: \mathbb{R}^{\#Z_+(\beta)} \rightarrow C^\infty(\Sigma; E)$$

が構成された。

近似解の性質1

$$\begin{aligned}\gamma|_{\mathbb{D}(1/2)} &\equiv 1 \quad \text{かつ} \quad \gamma|_{\mathbb{D} \setminus \mathbb{D}(3/4)} \equiv 0 \\ \gamma(z) & (k_p \cdot \sqrt{m} e^{-m|z|^2/2}) \\ \Phi_m : \mathbb{R}^{\#Z_+(\beta)} &\rightarrow C^\infty(\Sigma; E)\end{aligned}$$

命題 5.7

$$\|\Phi_m(\{k_p\})\|_2^2 \xrightarrow{m \rightarrow \infty} \pi \sum_{p \in Z_+(\beta)} k_p^2$$

(証明)

$$\begin{aligned}\|\Phi_m(\{k_p\})\|^2 &= \int_{\Sigma} |\Phi_m(\{k_p\})|^2 d\mu \\ &= \sum_{p \in Z_+(\beta)} \int_{U_p} \gamma(z)^2 (k_p \cdot \sqrt{m} e^{-m|z|^2/2})^2 d\mu \\ &= \sum_{p \in Z_+(\beta)} k_p^2 \int_{\mathbb{D}(\sqrt{m})} \gamma(z/\sqrt{m})^2 e^{|z|^2} ds dt \\ &\xrightarrow{m \rightarrow \infty} \sum_{p \in Z_+(\beta)} k_p^2 \cdot \pi\end{aligned}$$

すなわち, $m \gg 0$ のとき, Φ_m は単射である.

近似解の性質2

$$\gamma|_{\mathbb{D}(1/2)} \equiv 1 \quad \text{かつ} \quad \gamma|_{\mathbb{D} \setminus \mathbb{D}(3/4)} \equiv 0$$
$$\gamma(z)(k_p \cdot \sqrt{m} e^{-m|z|^2/2})$$

$m \gg 0$ のとき、 $\Phi_m(\{k_p\})$ はほぼ解である。

命題 5.8

定数 $C > 0$ が存在して、任意の $m > 0$ に対して、

$$\left\| D_m(\Phi_m(\{k_p\})) \right\|_2^2 \leq C^2 m e^{-m/4} \sum k_p^2$$

が成り立つ。

(証明) カットオフ γ に由来する誤差を評価する。

各 U_p では $D_m u = \bar{\partial} u + m z u$ なので、

$$D_m(\Phi_m(\{k_p\})) = (\bar{\partial} \gamma(z)) k_p \sqrt{m} e^{-m|z|^2/2}$$

である。 γ は $\mathbb{D}(1/2)$ 上では定数なので、次の不等式がわかる。

$$\begin{aligned} & \left\| D_m(\Phi_m(\{k_p\})) \right\|_2^2 \\ &= \sum \int_{\mathbb{D} \setminus \mathbb{D}(1/2)} |(\bar{\partial} \gamma(z))|^2 k_p^2 m e^{-m|z|^2} ds dt \\ &\leq m e^{-m/4} \int_{\mathbb{D} \setminus \mathbb{D}(1/2)} |(\bar{\partial} \gamma(z))|^2 ds dt \cdot \sum k_p^2 \end{aligned}$$

近似解から真の解へ

$$\|\Phi_m(\{k_p\})\|_2^2 \xrightarrow{m \rightarrow \infty} \pi \sum_{p \in Z_+(\beta)} k_p^2$$

$$\left\| D_m(\Phi_m(\{k_p\})) \right\|_2^2 \leq C^2 m e^{-m/4} \sum k_p^2$$

近似解から真の解を構成するために、 $D_m: C^\infty(\Sigma; E) \rightarrow C^\infty(\Sigma; F)$ の右逆

$$Q_m: \text{Im}(D_m) \rightarrow (\text{Ker}(D_m))^\perp$$

を考えよう。 $D_m(Q_m \alpha) = \alpha$ であり、例えば $Q_m := D_m^*(D_m D_m^*)^{-1}$ とすればよい。

さて、任意の $\{k_p\}$ に対して、 $u := \Phi_m(\{k_p\})$ とするとき、

$$D_m(u - Q_m(D_m u)) = D_m u - D_m(Q_m(D_m u)) = 0$$

であって、 $u - Q_m(D_m u)$ は真の解である。

注意 5.9: 非線型偏微分方程式を考えるときには、このステップでは陰関数定理を定量的に使うことになり、ASD方程式では例えばTaubesノルムが導入される。

ただし、 $u - Q_m(D_m u) = 0$ かもしれない。

ところで、 $\pi \sum k_p^2 = 1$ のとき、 $\|u\|_2^2 \approx 1$ かつ $\|D_m u\|_2^2 \ll 1$ であった。従って、 $u - Q_m(D_m u) \neq 0$ を保証するためには、 Q_m の作用素ノルムを評価すればよい。

右逆 Q_m の評価

$$Q_m : \text{Im}(D_m) \rightarrow (\text{Ker}(D_m))^\perp$$

定理 5.10

定数 $C > 0$ と m_2 が存在して、任意の $m \geq m_2$ について、任意の $\alpha \in \text{Im}(D_m)$ に対して、

$$\|Q_m \alpha\|_2^2 \leq C^2 \|\alpha\|_2^2$$

が成り立つ。

$u = Q_m \alpha$ のとき、 $D_m u = D_m(Q_m \alpha) = \alpha$ なので、任意の $u \in (\text{Ker}(D_m))^\perp$ に対して、

$$\|u\|_2^2 \leq C^2 \|D_m u\|_2^2$$

を示せばよい。

証明は背理法による。発散する列 $m_j \rightarrow \infty$ と $u_j \in C^\infty(\Sigma; E)$ が存在して、

$$\|u_j\|_2^2 = 1 \quad \text{かつ} \quad \|D_{m_j} u_j\|_2^2 \rightarrow 0$$

と仮定する。(続きは非線型方程式のときにやる。)

課題 5.6 : 自分で詳細を補ってみよ。

真の解の構成

写像 $\text{sol}: \mathbb{R}^{\#Z_+(\beta)} \rightarrow \text{Ker } D_m$ を,

$$\{k_p\} \mapsto \Phi_m(\{k_p\}) - Q_m(D_m(\Phi_m(\{k_p\})))$$

と定める.

定理 5.11

定数 $m_3 > 0$ が存在して, 任意の $m \geq m_3$ に対して, sol は単射である. 特に, $\#Z_+(\beta) \leq \dim \text{Ker } D_m$ である.

(証明) 背理法による. 発散する列 $m_j \rightarrow \infty$ と列 $\{k_{p,j}\}$ が存在して,

$$\pi \sum_{p \in Z_+(\beta)} k_p^2 = 1 \quad \text{かつ} \quad \|\text{sol}(\{k_p\})\|_2^2 \rightarrow 0$$

と仮定する. ところが,

- $\|\Phi_m(\{k_p\})\|_2^2 \xrightarrow{m \rightarrow \infty} \pi \sum_{p \in Z_+(\beta)} k_p^2$
- $\left\| D_m(\Phi_m(\{k_p\})) \right\|_2^2 \leq C^2 m e^{-m/4} \sum k_p^2$
- $\exists C > 0 \quad \exists m_2 > 0 \quad \forall m \geq m_2 \quad \|Q_m \alpha\|_2^2 \leq C^2 \|\alpha\|_2^2$

だった. これは矛盾.

ここまでのまとめ

まずは、Wittenの局所化の議論によって、

定数 $m_0 > 0$ が存在して、任意の $m \geq m_0$ に対して、 $\dim \text{Ker } D_m \leq \#Z_+(\beta)$ である。

を示した。

次に、Taubesの貼り合わせの議論によって、

定数 $m_3 > 0$ が存在して、任意の $m \geq m_3$ に対して、 $\#Z_+(\beta) \leq \dim \text{Ker } D_m$ である。

を示した。

系 5.12

任意の $m \geq \max(m_0, m_3)$ に対して、 $\dim \text{Ker } D_m = \#Z_+(\beta)$ である。

全く同様にして、 $\dim \text{Coker } D_m = \#Z_-(\beta)$ もわかる。

よって、 $m \geq \max(m_0, m_3)$ のとき、

$$\text{ind } D_m = \dim \text{Ker } D_m - \dim \text{Coker } D_m = \#Z_+(\beta) - \#Z_-(\beta) = c_1(\overline{\text{Hom}}_{\mathbb{C}}(E, F))$$

が示された。

Green核の構成

6. Stokesの定理と部分積分

境界の向きとStokesの定理

まずは境界の向き付けとStokesの定理について整理しておこう。

以下，向き付けと体積形式を同一視する。

Euclid空間のときの境界の向き付け

n 次元Euclid空間 \mathbb{R}^n の標準座標を (x^1, \dots, x^n) とする.

\mathbb{R}^n の標準的な向きは

$$dx^1 \wedge \dots \wedge dx^n$$

で与えられる.

左半平面 $X := (-\infty, 0] \times \mathbb{R}^{n-1}$ に対して, その境界 $\partial X = \{0\} \times \mathbb{R}^{n-1}$ のStokes向き付けを

$$dx^2 \wedge \dots \wedge dx^n$$

と定める. このとき, $\nu := \partial/\partial x^1$ は外向き法ベクトル場であり, 包含写像 $i: \{0\} \times \mathbb{R}^{n-1} \rightarrow \mathbb{R}^n$ に対して,

$$dx^2 \wedge \dots \wedge dx^n = i^*(\iota_\nu(dx^1 \wedge \dots \wedge dx^n))$$

が成り立つことに注意せよ.

Euclid空間のときの境界の向き付けとStokesの定理

また、 $f \in C_0^\infty(X)$ に対して、 $\alpha := f dx^2 \wedge \cdots \wedge dx^n$ とするとき、

$$\begin{aligned}d\alpha &= \frac{\partial f}{\partial x^1} dx^1 \wedge dx^2 \wedge \cdots \wedge dx^n \\i^*(\iota_\nu(\alpha)) &= f(0, x^2, \dots, x^n) dx^2 \wedge \cdots \wedge dx^n\end{aligned}$$

であり、

$$\begin{aligned}\int_X d\alpha &= \int_X \frac{\partial f}{\partial x^1} dx^1 \wedge dx^2 \wedge \cdots \wedge dx^n \\&= \int_{(-\infty, 0] \times \mathbb{R}^{n-1}} \frac{\partial f}{\partial x^1} dx^1 dx^2 \cdots dx^n \\&= \int_{\mathbb{R}^n} \left[\int_{-\infty}^0 \frac{\partial f}{\partial x^1} dx^1 \right] dx^2 \cdots dx^n \\&= \int_{\mathbb{R}^n} f(0, x^2, \dots, x^n) dx^2 \cdots dx^n \\&= \int_{\partial X} f(0, x^2, \dots, x^n) dx^2 \wedge \cdots \wedge dx^n \\&= \int_{\partial X} i^*(\iota_\nu(\alpha))\end{aligned}$$

が成り立つ。

多様体のときの境界の向き付け

X を n 次元境界付き有向多様体とする. $i: \partial X \rightarrow X$ を境界からの埋込写像として, ν を外向き法ベクトルとする. X の体積形式が $\text{vol}_{(X,g)}$ であるとき, 境界 ∂X の体積形式 $\text{vol}_{\partial X, i^*g}$ を

$$\text{vol}_{\partial X, i^*g} := i^*(\iota_\nu(\text{vol}_{(X,g)}))$$

により定め, **Stokes向き付け**と呼ぶ. 以後, 境界には常にStokes向き付けを入れる.

例 6.1: $\{x = (x^1, \dots, x^n) \in \mathbb{R}^n \mid x^n > 0\} \supset \mathbb{R}^{n-1} \times \{0\}$ に対して, 外向き法ベクトルは $-\partial/\partial x^n$ であり, 境界 $\mathbb{R}^{n-1} \times \{0\}$ のStokes向き付けは

$$\iota_{-\frac{\partial}{\partial x^n}}(dx^1 \wedge \dots \wedge dx^n) = (-1)(-1)^{n-1} dx^1 \wedge \dots \wedge dx^{n-1} = (-1)^n dx^1 \wedge \dots \wedge dx^{n-1}$$

となる.

多様体のときの境界の向き付け

X を n 次元境界付き有向多様体とする. $i: \partial X \rightarrow X$ を境界からの埋込写像として, ν を外向き法ベクトルとする. X の体積形式が $\text{vol}_{(X,g)}$ であるとき, 境界 ∂X の体積形式 $\text{vol}_{\partial X, i^*g}$ を

$$\text{vol}_{\partial X, i^*g} := i^*(\iota_\nu(\text{vol}_{(X,g)}))$$

により定め, **Stokes向き付け**と呼ぶ. 以後, 境界には常にStokes向き付けを入れる.

定理 6.2 (Stokesの定理)

X を n 次元境界付き有向多様体として, $i: \partial X \rightarrow X$ を境界からの埋込写像とする. このとき, 任意の $\omega \in \Omega_c^{n-1}(X)$ に対して,

$$\int_X d\omega = \int_{\partial X} i^*(\omega)$$

が成り立つ.

すなわち, Stokes向き付けとは, Stokesの定理が成り立つような向き付けのことである.

Riemann多様体の体積形式

(X, g) を n 次元境界付き有向Riemann多様体とする。

定義 6.3

$\text{vol}_{(X,g)} = \sqrt{\det g_{ij}} dx^1 \wedge \cdots \wedge dx^n$ をRiemann体積形式とする。

$i: \partial X \rightarrow X$ を境界からの埋込写像として、 ν を外向き単位法ベクトルとする。

∂X には、Stokes向き付けと誘導計量 i^*g を入れる。

命題 6.4

このとき、 $(\partial X, i^*g)$ のRiemann体積形式 $\text{vol}_{(\partial X, i^*g)}$ は

$$\text{vol}_{(\partial X, i^*g)} = i^*(\iota_\nu(\text{vol}_{(X,g)}))$$

をみたす。

課題 6.1: これを示せ。

Hodge作用素

(X, g) を n 次元境界付き有向Riemann多様体とする。

$\text{vol}_g = \sqrt{\det g_{ij}} dx^1 \wedge \cdots \wedge dx^n$ を Riemann体積形式とする。

$i: \partial X \rightarrow X$ を境界からの埋込写像として, ν を外向き単位法ベクトルとする。

∂X には, Stokes向き付けと誘導計量 i^*g を入れる。

命題 6.5

このとき, 任意の $\alpha, \beta \in \Omega^p(X)$ に対して,

$$i^*(\alpha \wedge *_g \beta) = i^*(\alpha) \wedge *_i i^*(\beta)$$

が成り立つ。

定義 6.6

任意の $\alpha, \beta \in \Omega^p(X)$ に対して, $(\alpha, \beta) \text{vol}_g := \alpha \wedge *_g \beta$ と定める。

命題 6.7

任意の $\alpha \in \Omega^p(X)$ に対して, $d^* \alpha = (-1)^{n(p-1)+1} * d * \alpha$ が成り立つ。

課題 6.2: これらを示せ。

部分積分の公式

X を n 次元境界付き有向多様体として, $i: \partial X \rightarrow X$ を境界からの埋込写像とする. このとき, 任意の $\omega \in \Omega_c^{n-1}(X)$ に対して,

$$\int_X d\omega = \int_{\partial X} i^*(\omega)$$

が成り立つ.

定理 6.8 (部分積分の公式)

(X, g) を n 次元境界付き有向Riemann多様体とする. $i: \partial X \rightarrow X$ を境界からの埋込写像として, ν を外向き法ベクトルとする. 任意の $\alpha \in \Omega^{p-1}(X)$ と $\beta \in \Omega^p(X)$ に対して,

$$\int_X (d\alpha, \beta)_g d\mu = \int_X (\alpha, d^*\beta)_g d\mu + \int_{\partial X} (\alpha, \iota_\nu(\beta))_{i^*g} d\sigma$$

が成り立つ.

(証明) 積の微分公式

$$d(\alpha \wedge *_g \beta) = d\alpha \wedge *_g \beta + (-1)^{p-1} \alpha \wedge d(*_g \beta)$$

とStokesの定理より従う.

また, $i^*(\alpha \wedge *_g \beta) = i^*(\alpha) \wedge *_{i^*g}(\iota_\nu(\beta))$ と $d^*\beta = (-1)^{n(p-1)+1} *_g d*\beta$ にも注意せよ.

Greenの公式

$$\int_X (d\alpha, \beta)_g d\mu = \int_X (\alpha, d^*\beta)_g d\mu + \int_{\partial X} (\alpha, \iota_\nu(\beta))_{i^*g} d\sigma$$

定理 6.9

(X, g) を n 次元境界付き有向Riemann多様体として, ν を ∂X の外向き法ベクトルとする. 任意の $u, v \in C^\infty(X)$ に対して,

$$\int_X u \Delta v d\mu = \int_X (\nabla u, \nabla v) d\mu - \int_{\partial X} u \frac{\partial v}{\partial \nu} d\sigma$$

が成り立つ.

(証明) 部分積分の公式において, $\alpha = u$ かつ $\beta = dv$ とせよ.

系 6.10

(X, g) を n 次元境界付き有向Riemann多様体として, ν を ∂X の外向き法ベクトルとする. 任意の $u, v \in C^\infty(X)$ に対して,

$$\int_X \Delta u d\mu = - \int_{\partial X} \frac{\partial u}{\partial \nu} d\sigma$$

が成り立つ.

符号の確認

(X, g) を n 次元境界付き有向 Riemann 多様体として, ν を ∂X の外向き法ベクトルとする. 任意の $u, v \in C^\infty(X)$ に対して,

$$\int_X \Delta u \, d\mu = - \int_{\partial X} \frac{\partial u}{\partial \nu} \, d\sigma$$

が成り立つ.

念のために符号を確認しておこう.

$X = D^2 \subset \mathbb{R}^2$ として, 標準的な計量と向きを与える. $\partial X = S^1$ の Stokes 向き付けは左回りであり, $\partial/\partial r$ が外向き単位法ベクトルである. $u(x, y) = x^2 + y^2 = r^2$ とする. このとき,

$$\begin{aligned} \Delta u &= - \left(\frac{\partial^2}{\partial x^2} + \frac{\partial^2}{\partial y^2} \right) u = -4 \\ \frac{\partial u}{\partial \nu} &= \frac{\partial u}{\partial r} = 2r \end{aligned}$$

なので,

$$\begin{aligned} \int_X \Delta u \, d\mu &= (-4) \cdot \pi = -4\pi \\ - \int_{\partial X} \frac{\partial u}{\partial \nu} \, d\sigma &= -(2 \cdot 2\pi) = -4\pi \end{aligned}$$

となる. 確かに符号は正しい.

Greenの公式

(X, g) を n 次元境界付き有向Riemann多様体として, ν を ∂X の外向き法ベクトルとする. 任意の $u, v \in C^\infty(X)$ に対して,

$$\int_X u \Delta v \, d\mu = \int_X (\nabla u, \nabla v) \, d\mu - \int_{\partial X} u \frac{\partial v}{\partial \nu} \, d\sigma$$

が成り立つ.

系 6.11 (Greenの公式)

(X, g) を n 次元境界付き有向Riemann多様体として, ν を ∂X の外向き法ベクトルとする. 任意の $u, v \in C^\infty(X)$ に対して,

$$\int_X (u(\Delta v) - (\Delta u)v) \, d\mu = - \int_{\partial X} \left(u \frac{\partial v}{\partial \nu} - \frac{\partial u}{\partial \nu} v \right) \, d\sigma$$

が成り立つ.

発散

(X, g) を n 次元境界付き有向Riemann多様体として, $\text{vol}_{X,g}$ を Riemann体積形式とする. 発散作用素 $\text{div}: \mathcal{X}(X) \rightarrow C^\infty(X)$ を

$$\text{div}(V) := *_g d(\iota_V(\text{vol}_{(X,g)}))$$

により定める. Cartanの公式 $\mathcal{L}_V = \iota_V \circ d + d \circ \iota_V$ により,

$$\begin{aligned}\text{div}(V) &= *_g d(\iota_V(\text{vol}_{(X,g)})) \\ &= *_g [\iota_V(d\text{vol}_{(X,g)}) + d(\iota_V(\text{vol}_{(X,g)}))] \\ &= *_g [\mathcal{L}_V(\text{vol}_{(X,g)})]\end{aligned}$$

を得る. すなわち,

$$\mathcal{L}_V(\text{vol}_{(X,g)}) = (\text{div}(V))\text{vol}_{(X,g)}$$

が成り立つ.

例 6.12: $(X, g) = \mathbb{R}^2$ のとき,

$$\begin{aligned}\iota_V(dx^1 \wedge dx^2) &= V^i(\iota_{\partial_i}(dx^1 \wedge dx^2)) = V^1 dx^2 - V^2 dx^1 \\ *_g d(\iota_V(dx^1 \wedge dx^2)) &= \frac{\partial V^1}{\partial x^1} dx^1 \wedge dx^2 + \frac{\partial V^2}{\partial x^2} dx^1 \wedge dx^2\end{aligned}$$

なので,

$$\text{div}(V) = *_g d(\iota_V(dx^1 \wedge dx^2)) = \frac{\partial V^1}{\partial x^1} + \frac{\partial V^2}{\partial x^2}$$

を得る.

Gaussの発散定理

$$\operatorname{div}(V) := *_g d(\iota_V(\operatorname{vol}_{(X,g)}))$$

定理 6.13 (Gaussの発散定理)

(X, g) を n 次元境界付き有向Riemann多様体として, ν を ∂X の外向き法ベクトルとする. 任意の $V \in \mathfrak{X}(X)$ に対して,

$$\int_X \operatorname{div} V \, d\mu = \int_{\partial X} (V, \nu) \, d\sigma$$

が成り立つ.

(証明) まずはStokesの定理より

$$\begin{aligned} \int_X (\operatorname{div} V) \operatorname{vol}_{(X,g)} &= \int_X d(\iota_V(\operatorname{vol}_{(X,g)})) \\ &= \int_{\partial X} i^*(\iota_V(\operatorname{vol}_{(X,g)})) \end{aligned}$$

を得る. また, 局所座標を取って考えれば,

$$i^*(\iota_V(\operatorname{vol}_{(X,g)})) = (V, \nu) \operatorname{vol}_{(\partial X, i^*g)}$$

がわかる.

接続のとき

(X, g) を n 次元境界付き有向 Riemann 多様体として, ν を ∂X の外向き法ベクトルとする.

(E, h) を X 上の Hermite ベクトル束とする. A を E 上の計量接続とする.

このとき, 任意の $\phi \in \Gamma(E)$ に対して,

$$(\phi, \nabla_A^* \nabla_A \phi) = |\nabla_A \phi|^2 + \frac{1}{2} \Delta |\phi|^2$$

が成り立つ.

それぞれの項の符号に混乱したらラプラシアンの特値が正であることを思い出す.

符号を確認しておこう 全て自明な一次元のとき, $\phi = x^2$ として,

$$\begin{aligned} (\phi, \nabla_A^* \nabla_A \phi) &= (x^2, -2) = -2x^2 \\ |\nabla_A \phi|^2 + \frac{1}{2} \Delta |\phi|^2 &= |2x|^2 + \frac{1}{2} (-12x^2) = -2x^2 \end{aligned}$$

となる.

接続のとき

$$(\phi, \nabla_A^* \nabla_A \phi) = |\nabla_A \phi|^2 + \frac{1}{2} \Delta |\phi|^2$$
$$\int_X \Delta u \, d\mu = - \int_{\partial X} \frac{\partial u}{\partial \nu} \, d\sigma$$

定理 6.14

(X, g) を n 次元境界付き有向 Riemann 多様体として, ν を ∂X の外向き法ベクトルとする.

(E, h) を X 上の Hermite ベクトル束とする. A を E 上の計量接続とする.

このとき, 任意の $\phi \in \Gamma(E)$ に対して,

$$\int_X (\phi, \nabla_A^* \nabla_A \phi) \, d\mu = \int_X |\nabla_A \phi|^2 \, d\mu - \frac{1}{2} \int_{\partial X} \frac{\partial |\phi|^2}{\partial \nu} \, d\sigma$$

が成り立つ.

中間値の定理について

$$\int_X \Delta u \, d\mu = - \int_{\partial X} \frac{\partial u}{\partial \nu} \, d\sigma$$

定理 6.15

$$\int_{|x-y| \leq \rho} \Delta u(x) \, d\mu_x = -\rho^{n-1} \frac{\partial}{\partial \rho} \left(\rho^{1-n} \int_{|x-y|=\rho} u(x) \, d\sigma_x \right)$$

(証明) Greenの公式で計算する.

$$\begin{aligned} \int_{|x-y| \leq \rho} \Delta u(x) \, d\mu_x &= - \int_{|x-y|=\rho} \frac{\partial u}{\partial \nu}(x) \, d\sigma_x \\ &= - \int_{|\omega|=1} \frac{\partial u}{\partial \rho}(y + \rho\omega) \rho^{n-1} \, d\sigma_\omega \\ &= -\rho^{n-1} \int_{|\omega|=1} \frac{\partial u}{\partial \rho}(y + \rho\omega) \, d\sigma_\omega \\ &= -\rho^{n-1} \frac{\partial}{\partial \rho} \int_{|\omega|=1} u(y + \rho\omega) \, d\sigma_\omega \\ &= -\rho^{n-1} \frac{\partial}{\partial \rho} \left(\rho^{1-n} \int_{|x-y|=\rho} u(x) \, d\sigma_x \right) \end{aligned}$$

中間値の定理について

$$\int_{|x-y|\leq\rho} \Delta u(x) \, d\mu_x = -\rho^{n-1} \frac{\partial}{\partial \rho} \left(\rho^{1-n} \int_{|x-y|=\rho} u(x) \, d\sigma_x \right)$$

系 6.16

$\Delta u \leq 0$ ならば,

$$\rho^{1-n} \int_{|x-y|=\rho} u(x) \, d\sigma_x$$

は ρ の非減少函数である。特に,

$$n|\mathbb{D}^n|u(y) \leq \rho^{1-n} \int_{|x-y|=\rho} u(x) \, d\sigma_x$$

が成り立つ。

系 6.17

$\Delta u \leq 0$ ならば,

$$u(y) \leq \frac{1}{n|\mathbb{D}^n|} \int_{|x-y|\leq\rho} u(x) \, d\mu_x$$

が成り立つ。

再掲：バブルの解析

$\Delta f \leq 0$ ならば、 $f(y) \leq \frac{1}{n|\mathbb{D}^n|} \int_{|x-y| \leq \rho} f(x) d\mu_x$ が成り立つ。

滑らかな函数 $u: \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{C}$ が、

$$\bar{\partial}u + \bar{z} \cdot \bar{u} = 0 \text{ かつ } \int_{\mathbb{C}} |u|^2 ds dt < \infty$$

を充たすならば、 $u \equiv 0$ である。

(証明) 一般に、 $\Delta|u|^2 = 2\operatorname{Re}\langle u, \Delta u \rangle - 2|\nabla u|^2$ である。また、 $\bar{\partial}u + \bar{z} \cdot \bar{u} = 0$ によって、

$$\Delta u = -\partial \bar{\partial}u = -\partial(-\bar{z} \cdot \bar{u}) = \bar{z}(\partial \bar{u}) = \bar{z} \cdot \overline{\bar{\partial}u} = \bar{z} \cdot \overline{-\bar{z} \cdot \bar{u}} = -|z|^2 u$$

である。よって、

$$\Delta|u|^2 = 2\operatorname{Re}\langle u, \Delta u \rangle - 2|\nabla u|^2 = 2\operatorname{Re}\langle u, -|z|^2 u \rangle - 2|\nabla u|^2 = -2|z|^2|u|^2 - 2|\nabla u|^2$$

を得る。特に、 $\Delta|u|^2 \leq 0$ である。従って、平均値の定理と仮定より、任意の $x \in \mathbb{C}$ に対して、

$$|u(x)|^2 \leq \frac{1}{\pi r^2} \int_{|z-x| < r} |u(z)|^2 ds dt \leq \frac{1}{\pi r^2} \int_{\mathbb{C}} |u|^2 ds dt \xrightarrow{r \rightarrow \infty} 0$$

が成り立つ。

7. Newtonポテンシャルについて

$r^{-\alpha}$ の積分について

n 次元空間の単位球を \mathbb{D}^n とする。また、一般に、 $x \in \mathbb{R}^n$ に対して、 $r := |x|$ とも書く。

$$\mathbb{D}^n := \{x \in \mathbb{R}^n \mid |x| \leq 1\}$$

まずは基本は、

$$\int_0^1 \frac{dr}{r^\alpha} < \infty \iff \alpha < 1$$

である。

次に、 n 次元のとき、

$$\int_{\mathbb{D}^n} \frac{dx}{|x|^\alpha} = \int_{\mathbb{D}^n} \frac{1}{r^\alpha} r^{n-1} dr d\sigma = |\mathbb{S}^{n-1}| \int_0^1 \frac{dr}{r^{\alpha-(n-1)}}$$

なので、

$$\int_{\mathbb{D}^n} \frac{dx}{|x|^\alpha} < \infty \iff \alpha - (n-1) < 1 \iff \alpha < n$$

を得る。

課題 7.1 : 無限遠点での可積分性についても同様の考察をせよ。

Newtonポテンシャル

$\omega_n := |\mathbb{S}^n|$ とする。今後、簡単のため、 $n \geq 3$ とする。

定義 7.1

Newtonポテンシャル $N: \mathbb{R}^n \setminus \{0\} \rightarrow \mathbb{R}$ を

$$N(x) := \frac{1}{n(n-2)\omega_n} \frac{1}{|x|^{(n-2)}}$$

と定める。二変数関数 $N(x, y) := N(x - y)$ もNewtonポテンシャルと呼ぶ。

$$\begin{aligned}\partial_j N &= \frac{1}{n\omega_n} \frac{1}{|x|^{(n-1)}} \cdot \frac{x_j}{|x|} \\ \partial_{jj} N &= \frac{1}{\omega_n} \frac{1}{|x|^n} \left(\frac{x_j^2}{|x|^2} - \frac{1}{n} \right)\end{aligned}$$

N の可積分性について、次がわかる。

- N は局所可積分である。 $\partial_j N$ も局所可積分である。
- しかし、 $\partial_{ij} N$ は局所可積分ではない！
- また、 $p < n/(n-2)$ で N^p は局所可積分であって、 $q > n/(n-2)$ で N^q は無限遠で可積分である。ここで、 $n/(n-2)$ の双対指数が $n/2$ であることを注意しておく。

Newtonポテンシャル

$$N(x) := \frac{1}{n(n-2)\omega_n} \frac{1}{|x|^{(n-2)}}$$
$$\partial_{jj}N = \frac{1}{\omega_n} \frac{1}{|x|^n} \left(\frac{x_j^2}{|x|^2} - \frac{1}{n} \right)$$

命題 7.2

$\mathbb{R}^n \setminus \{0\}$ において,

$$\Delta N = 0$$

が成り立つ.

次に, 原点でのNの超函数微分を計算する.

Nの超函数微分

$$N(x) := \frac{1}{n(n-2)\omega_n} \frac{1}{|x|^{(n-2)}}$$

$$|\nabla N| = O(r^{1-n})$$

$$\Delta N = 0 \text{ on } \mathbb{R}^n \setminus \{0\}$$

$$\int_X (u(\Delta v) - (\Delta u)v) d\mu = - \int_{\partial X} \left(u \frac{\partial v}{\partial \nu} - \frac{\partial u}{\partial \nu} v \right) d\sigma$$

\mathbb{R}^n 上の滑らかなコンパクト台函数 $\phi \in C_c^\infty(\mathbb{R}^n)$ をとる.

$$\begin{aligned} \langle \Delta N, \phi \rangle &:= \int_{\mathbb{R}^n} \frac{1}{n\omega_n|x|^{(n-2)}} \Delta \phi(x) dx \\ &= \lim_{\epsilon \rightarrow 0} \int_{|x| \geq \epsilon} N(x) \Delta \phi(x) dx \\ &= \lim_{\epsilon \rightarrow 0} \left(- \int_{|x|=\epsilon \text{ 右回り}} N(-\partial_\tau \phi) - (-\partial_\tau N) \phi d\sigma \right) \\ &= \phi(0) \end{aligned}$$

より, $\Delta N = \delta$ がわかった. $\partial_{ij} N = O(r^{-n})$ は局所可積分ではないので, 安易に微分と積分を交換してはならない.

課題 7.2: $\frac{1}{|\xi|^2}$ を直接計算してみよ.

Greenの表現公式

$$N(x) := \frac{1}{n(n-2)\omega_n} \frac{1}{|x|^{(n-2)}}$$

$N(x, y) := N(x - y)$ だった.

定理 7.3 (Greenの表現公式)

任意の滑らかなコンパクト台函数 $\phi \in C_c^\infty(\mathbb{R}^n; \mathbb{R})$ に対して, 各点 $x \in \mathbb{R}^n$ において,

$$u(x) := \int_{\mathbb{R}^n} N(x, y) \phi(y) dy$$

とすれば, $u \in C^\infty(X; \mathbb{R})$ であって,

$$\Delta u = \phi$$

を充たす.

注意 7.4 : ϕ の台はコンパクトでも u の台は非コンパクトかもしれない.

課題 7.3 : Greenの表現公式を示せ.

注意 7.5 : この講義では, NewtonポテンシャルとGreen核とGreen函数と基本解を区別せずに使う. しかし, 本当は微妙に違う. 基本解のうちで, 境界条件まで考慮したものがGreen函数で, さらにその積分核がGreen核で, 特に \mathbb{R}^n で無限遠で消える境界条件を課したものがNewtonポテンシャルである.

Helmholtz方程式

定義 7.6

線型偏微分方程式

$$\Delta u + u = \phi$$

をHelmholtz方程式という。

g をHelmholtz方程式の基本解とする。すなわち、

$$\Delta g + g = \delta$$

とする。このとき、

$$0 < g(x) \leq \frac{C}{|x|^{n-2}} \quad \text{if } 0 < |x| < 1$$

$$0 < g(x) \leq e^{-|x|/2} \quad \text{if } 1 \leq |x|$$

がわかる。すなわち、Helmholtz方程式の基本解は、Newtonポテンシャルと違って、無限遠で指数減衰する。その由来は、 $1/(1+k^2)$ と $1/k^2$ は、 $k \rightarrow \infty$ での振る舞いは同じだが、 $k=0$ での様子が全然違うことにある。

課題 7.4: $1/(|\xi|^2 + 1)$ のFourier変換を計算することによって、例えばBesselポテンシャルを用いて、Helmholtz方程式の基本解を求めよ。さらに、基本解の無限遠での減衰度を考察せよ。

8. 多様体上のHelmholtz方程式

多様体上のHelmholtz方程式

(X, g) を n 次元有向閉Riemann多様体とする。簡単のため、以後、 $n \geq 3$ とする。
 $\Delta = d^*d = -(\partial_1^2 + \cdots + \partial_n^2)$ である。

定理 8.1

任意の $\phi \in C^\infty(X; \mathbb{R})$ に対して、 $u \in C^\infty(X; \mathbb{R})$ が唯一つ存在して、

$$\Delta u + u = \phi$$

を充たす。すなわち、

$$\Delta + 1: C^\infty(X; \mathbb{R}) \rightarrow C^\infty(X; \mathbb{R})$$

は全単射である。

定義 8.2

$\Delta u + u = \phi$ を Helmholtz 方程式という。ただし、用語の濫用で、Poisson 方程式や Laplace 方程式と呼ぶことも多い。

以後しばらくは、閉多様体上の Helmholtz 方程式の L^2 -method による解法を紹介する。つまり、無限次元の Hilbert 空間の幾何を用いて、変分法的に Helmholtz 方程式を解く。

まずは Riesz の表現定理を復習しておこう。

Rieszの表現定理

$(H, \langle \cdot, \cdot \rangle)$ を実 Hilbert 空間とする. $u \in H$ に対して, $\|u\| := \sqrt{\langle u, u \rangle}$ とする.

線型写像

$$l: H \rightarrow \mathbb{R}$$

が有界であるとは, 定数 $C > 0$ が存在して, 任意の $u \in H$ に対して,

$$|l(u)| \leq C \|u\|$$

が成り立つことだった. H から \mathbb{R} への線型写像を線型汎関数ともいう.

定理 8.3 (Rieszの表現定理)

任意の有界線型汎関数 $l: H \rightarrow \mathbb{R}$ に対して, $u \in H$ が唯一つ存在して, 任意の $v \in H$ に対して,

$$l(v) = \langle u, v \rangle$$

が成り立つ.

課題 8.1 :

1. Rieszの表現定理の証明を復習せよ.
2. Lax-Milgramの定理を, 知らなければ, 調べよ.
3. Rieszの表現定理の証明を吟味して, 変分法の直接法との関係を考察せよ.

Helmholtz方程式の解法の流れ

目標は、 ϕ が与えられたとき、

$$\Delta u + u = \phi$$

を満たす u を見つけることだった。この方程式を書き直す。

もしも $\Delta u + u = \phi$ ならば、任意の v に対して、部分積分によって、

$$\begin{aligned} \int_X ((\nabla u, \nabla v) + (u, v)) \, d\mu &= \int_X ((\Delta u, v) + (u, v)) \, d\mu \\ &= \int_X (\Delta u + u, v) \, d\mu = \int_X (\phi, v) \, d\mu \end{aligned}$$

が成り立つ。ここで、左辺が u と v について対称であって、内積になっていることに注目する。実際、

$$\int_X ((\nabla v, \nabla v) + (v, v)) \, d\mu = 0$$

ならば、 $u = 0$ なので、非退化である。

定義 8.4

任意の $u, v \in C^\infty(X; \mathbb{R})$ に対して、

$$\langle u, v \rangle_{L^2_1} := \int_X ((\nabla u, \nabla v) + (u, v)) \, d\mu$$

と定める。これを $C^\infty(X; \mathbb{R})$ の L^2_1 内積という。

Helmholtz方程式の解法の流れ

$$\langle u, v \rangle_{L^2_1} := \int_X ((\nabla u, \nabla v) + (u, v)) \, d\mu$$

さらに、 $\phi \in C^\infty(X; \mathbb{R})$ が与えられたとき、線型汎関数 $l_\phi: C^\infty(X; \mathbb{R}) \rightarrow \mathbb{R}$ を

$$v \mapsto \int_X (\phi, v) \, d\mu$$

と定めれば、Cauchy-Schwarzの不等式より、

$$\int_X (\phi, v) \, d\mu \leq \left(\int_X |\phi|^2 \, d\mu \right)^{1/2} \left(\int_X |v|^2 \, d\mu \right)^{1/2} \leq \left(\int_X |\phi|^2 \, d\mu \right)^{1/2} \|v\|_{L^2_1}$$

である。

Helmholtz方程式の解法の流れ

もしも $\Delta u + u = \phi$ ならば、任意の v に対して、部分積分によって、

$$\int_X ((\nabla u, \nabla v) + (u, v)) \, d\mu = \int_X (\Delta u + u, v) \, d\mu = \int_X (\phi, v) \, d\mu$$

が成り立つ。

$$\langle u, v \rangle_{L_1^2} := \int_X ((\nabla u, \nabla v) + (u, v)) \, d\mu$$
$$\ell_\phi(v) := \int_X (\phi, v) \, d\mu \leq \left(\int_X |\phi|^2 \, d\mu \right)^{1/2} \|v\|_{L_1^2}$$

任意の有界線型汎関数 $\ell: H \rightarrow \mathbb{R}$ に対して、 $u \in H$ が唯一つ存在して、任意の $v \in H$ に対して、 $\ell(v) = \langle u, v \rangle$ が成り立つ。

定義 8.5

函数空間 $C^\infty(X; \mathbb{R})$ の内積 $\langle \cdot, \cdot \rangle_{L_1^2}$ による完備化を $L_1^2(X; \mathbb{R})$ とする。

このとき、線型汎関数 $\ell_\phi: C^\infty(X; \mathbb{R}) \rightarrow \mathbb{R}$ は $L_1^2(X; \mathbb{R})$ 上の有界線型汎関数に延長する。よって、Rieszの表現定理によって、 $\phi \in C^\infty(X; \mathbb{R})$ が与えられたとき、 $u \in L_1^2(X; \mathbb{R})$ が存在して、任意の $v \in L_1^2(X; \mathbb{R})$ に対して、

$$\ell_\phi(v) = \langle u, v \rangle_{L_1^2}$$

を充たす。これでHelmholtz方程式が半分解けた。

Helmholtz方程式の解法の流れ：正則性

もしも $\Delta u + u = \phi$ ならば、任意の v に対して、

$$\langle u, v \rangle_{L_1^2} := \int_X ((\nabla u, \nabla v) + (u, v)) \, d\mu = \int_X (\Delta u + u, v) \, d\mu = \int_X (\phi, v) \, d\mu =: \ell_\phi(v)$$

が成り立つ。

Rieszの表現定理によって、 $\ell_\phi(v) = \langle u, v \rangle_{L_1^2}$ を充たす $u \in L_1^2(X; \mathbb{R})$ の存在はわかった。しかし、 $L_1^2(X; \mathbb{R})$ は完備化で作られたナゾの空間なので、 $u \in C^\infty(X; \mathbb{R})$ を示したい。それを示すのが正則性(regularity)の議論である。しかし、この講義では扱わない。

定理 8.6

$\phi \in C^\infty(X; \mathbb{R})$ かつ $u \in L_1^2(X; \mathbb{R})$ とする。このとき、任意の $v \in L_1^2(X; \mathbb{R})$ に対して、

$$\ell_\phi(v) = \langle u, v \rangle_{L_1^2}$$

が成り立つならば、 $u \in C^\infty(X; \mathbb{R})$ である。

正則性を示す手法の王道は、Nirenbergによる差分商(difference quotient)であろう。

ここまでで、Rieszの表現定理を経由して、Helmholtz方程式の解を構成した。さらに具体的に解を表示することができる。そのために使われるのがGreen函数である。

Green函数

(X, g) を n 次元有向閉Riemann多様体とする。 $\text{diag}(X) := \{(x, y) \in X \times X \mid x = y\}$ とする。 二点 $x, y \in X$ の g による距離を $d_g(x, y)$ とする。

定理 8.7 (Green函数の存在)

連続函数 $g: (X \times X \setminus \text{diag}(X)) \rightarrow \mathbb{R}$ が存在して、次を充たす。

- 任意の $x \in X$ に対して、 $y \mapsto g(x, y)$ は、 $X \setminus \{x\}$ 上で C^∞ 級である。
- 定数 $C > 0$ が存在して、 任意の $x, y \in X$ に対して、 $x \neq y$ ならば、

$$\left| d_g(x, y)^{n-2} g(x, y) - \frac{1}{(n-2)\omega_n} \right| \leq C d_g(x, y)$$
$$\left| d_g(x, y)^{n-1} |\nabla_y g(x, y)| - \frac{1}{\omega_n} \right| \leq C d_g(x, y)$$

- 任意の $u \in C^\infty(X; \mathbb{R})$ に対して、 各点 $x \in X$ において、

$$u(x) = \int_X g(x, y) (\Delta u(y) + u(y)) dy$$

が成り立つ。

- 任意の $x, y \in X$ に対して、 $x \neq y$ ならば、 $g(x, y) = g(y, x)$ である。
- 任意の $x, y \in X$ に対して、 $x \neq y$ ならば、 $g(x, y) > 0$ である。

Green函数の構成方法

$$u(x) = \int_X g(x, y) (\Delta u(y) + u(y)) dy$$

- Δ のスペクトル分解を用いて, $g(x, y) = \sum \frac{1}{1 + \lambda_j} \phi_j(x) \otimes \phi_j(y)$ とする.
- $\partial_t - (\Delta + 1)$ の熱核を構成してから, t について積分する.
- Schwarzの核定理を用いて超函数核を構成してから, hypoellipticityで滑らかさを示す.
- Leviの方法
 1. Euclid空間ではNewtonポテンシャルがあった.
 2. カットオフ函数により多様体にNewtonポテンシャルを移植する.
 3. 誤差項を評価する.
 4. Neumann級数として摂動論的に誤差を補正する.
- Aubinの教科書の方法
 1. 途中まではLeviの方法と同じ.
 2. Neumann級数を途中までで切り上げて, L^2 -methodを援用して誤差を補正する.
- Lee-Parkerの方法: Aubinの教科書の方法で, L^p 評価を用いる. 非コンパクトでの漸近展開が出しやすい.

この講義では, 最終日に時間が余ったら, Aubinの教科書の方法とLeviの方法を紹介したい.

9. Taubesノルム

本当に解くべき方程式

今まではHelmholtz方程式

$$\Delta u + u = \phi$$

の解法について述べてきた。

しかし、我々が本当に解くべき方程式は非線型である。具体的には、この方程式

$$\Delta_A u + u + H(\nabla u, \nabla u) + f(u) = \phi$$

を解きたい。

では、この方程式の設定を説明する。

本当に解くべき方程式のための設定

(X, g) を有向閉Riemann多様体として, E を X 上のHermiteベクトル束とする.

以後, 切断の間の $C^\infty(X; \mathbb{R})$ 加群としての線型写像と滑らかな束写像を同一視する.

H を有界対称双線型束写像

$$H: (E \otimes T^*X) \times (E \otimes T^*X) \rightarrow E$$

とする. すなわち, 定数 $C > 0$ が存在して, 任意の $u, v \in C^\infty(X; E \otimes T^*X)$ に対して,

$$|H(u, v)| \leq C|u||v|$$

が成り立つ.

定義 9.1

E 上の接続 A が計量接続であるとは, 任意の $u, v \in C^\infty(X; E)$ に対して, X の各点において,

$$d(u, v) = (\nabla u, v) + (u, \nabla v)$$

を充たすことである.

$f \in C^\infty(X; \text{End}(E))$ とする.

本当に解くべき方程式

(X, g) を有向閉Riemann多様体として, E を X 上のHermitianベクトル束とする.

- 有界対称双線型形式 $H: (E \otimes T^*X) \times (E \otimes T^*X) \rightarrow \mathbb{R}$
- 束写像 $f: E \rightarrow E$
- 計量接続 $\nabla_A: C^\infty(X; E) \rightarrow C^\infty(X; E \otimes T^*X)$

を固定データとする.

さて, $\phi \in C^\infty(X; E)$ が与えられたとき, 非線型偏微分方程式

$$\nabla_A^* \nabla_A u + u + H(\nabla_A u, \nabla_A u) + f(u) = \phi$$

を満たす u を見つけたい.

$H(\nabla_A u, \nabla_A u)$ が非線型項である.

以後, $\Delta_A := \nabla_A^* \nabla_A$ として, 接続ラプラシアンと呼ぶ.

何故この方程式を解きたいのか

$$\nabla_A^* \nabla_A u + u + H(\nabla_A u, \nabla_A u) + f(u) = \phi$$

この方程式は、四次元有向多様体の上の反自己双対方程式をモデルとしている。反自己双対方程式を解きたいので、この方程式も解きたい。

$$\begin{aligned} F^+(A_0 + d_{A_0}^* u) &= F^+(A_0) + d_{A_0}^+ d_{A_0}^* u + (d_{A_0}^* u \wedge d_{A_0}^* u)^+ \\ d_{A_0}^+ d_{A_0}^* u &= \frac{1}{2} \nabla_{A_0}^* \nabla_{A_0} u + \left(\frac{S}{6} - W^+ \right) u + F_{A_0}^+ \cdot u \end{aligned}$$

② 方程式の由来の説明

$$\dim_{\mathbb{R}} X = 4$$

やりたいこと $F^t(A) = 0$ とする A を見つけたい!

Step 1 $\|F^t(A_0)\| \ll 1$ とする A_0 を見つけよう。

Step 2 $F^t(A_0 + a) = 0$ とする 摂動 $a \in \Omega'$ を見つけよう。

Ansatz $a = \underbrace{d_{A_0}^* u}_{\text{pink wavy line}}$, $u \in \Omega'$ という形で見よう。

↑ 何でこのように形にしようか?

(「 F -ワード」; F^u -ジ"固定)

$$F^+(A_0 + a) = F^+(A_0) + \underbrace{d_{A_0}^+ a}_{\substack{\text{3程} \text{ と } (2 \text{ elliptic } \tau_2 \text{ 子})}} + (a \wedge a)^+$$

$$a = d_{A_0}^* u \text{ のとき,}$$

$$F^+(A_0 + d_{A_0}^* u) = F^+(A_0) + \underbrace{d_{A_0}^+ d_{A_0}^* u}_{\substack{\text{elliptic } (= \tau_2 \text{ 子!!)}}} + (d_{A_0}^* u \wedge d_{A_0}^* u)^+$$

of. 調和形式論

$$[w] \quad dw = 0 \quad d(w + \underbrace{d\eta}_{\text{不変形式}}) = 0$$

$$F^+(A_0 + d_{A_1}^* u) = F^+(A_0) + \underbrace{d_{A_1}^+ d_{A_0}^+ u}_{\text{Weitzenböck}} + (d_{A_0}^+ u \wedge d_{A_0}^+ u)^+$$

$$d_{A_1}^+ d_{A_0}^+ u = \frac{1}{2} \nabla_{A_1}^+ \nabla_{A_0}^+ u + \left(\frac{S}{6} - W^f\right) u + F_{A_1}^+ \cdot u$$

(Weitzenböck ~~is~~)

$$\nabla_{A_0}^+ \nabla_{A_0}^+ u + 2\left(\frac{S}{6} - W^f\right) u + 2(d_{A_0}^+ u \wedge d_{A_1}^+ u)^+ + \underbrace{2F_{A_0}^+ \cdot u}_{f(u)} = \underbrace{-F^+(A_0)}_{\Phi}$$

$\mathbb{H}^3 \subset \mathbb{S}^4 \subset \mathbb{Z}^4$

$$(X, g) = (S^3, g_{\text{std}}) \quad \begin{cases} S=6 \\ W^f=0 \end{cases}$$

$$\leadsto \nabla_{A_1}^+ \nabla_{A_0}^+ u + u + H(\nabla_{A_1} u, \nabla_{A_0} u) + f(u) = \Phi$$

$$\nabla_{A_1}^* \nabla_{A_1} u + u + H(\nabla_{A_1} u, \nabla_{A_1} u) + f(u) = \phi.$$

この方程式を解きたい。

① A_0 が " 平坦 " ならば, $E = X \times \mathbb{R}$ と取り。

$$\nabla^* \nabla u + u + H(\nabla u, \nabla u) + f(u) = \phi$$

② $\nabla^* \nabla u + u = \phi$ とする。 \rightarrow Helmholtz eq.
 (非線形項 \rightarrow Taubes)

$$\textcircled{3} \nabla^* \nabla u + u + H(\nabla u, \nabla u) = \phi.$$

$$\textcircled{4} \nabla^* \nabla u + u + H(\nabla u, \nabla u) + f(u) = \phi$$

$A \rightarrow$ Kato

$$\textcircled{5} \nabla_{A_1}^* \nabla_{A_1} u + u + H(\nabla_{A_1} u, \nabla_{A_1} u) + f(u) = \phi.$$

I, $E = X \times \mathbb{R}$ かつ A : 自明の時,

$$(\Delta + 1)u + H(\nabla u, \nabla u) \in f(u) = \phi$$

I. i) $(\Delta + 1)u = \phi.$

Prop $\Delta + 1: C^\infty(X; \mathbb{R}) \rightarrow C^\infty(X; \mathbb{R})$
は全射である。

解 u , $(\Delta + 1)u = \phi$

$$\rightsquigarrow u(x) = \int_X g(x, y) \phi(y) dy$$

つまり、線形写像

$$G : C^\infty(x; \mathbb{R}) \rightarrow C^\infty(x; \mathbb{R})$$

$$\phi \mapsto \int g(x, y) \phi(y) dy$$

が存在して,

$$(\Delta + 1) \circ G = G \circ (\Delta + 1) = \text{id}.$$

とある。

Recall

- $g(x, y) > 0$
- $\int g(x, y) dy < \infty$

定義 (Tauber 114)

$$\|u\|_0 := \sup_{x \in X} \int g(x, y) |u(y)| dy.$$

$$C_0(X; \mathbb{R}) := \overline{C^\infty(X; \mathbb{R})}^{\|\cdot\|_0}$$

Prop $G: C^\infty(X; \mathbb{R}) \rightarrow C^\infty(X; \mathbb{R})$ は,

連続空間 C_0 から L^∞ への有界線型写像に
拡張された。

$$G\phi = \int g(x, y) \phi(y) dy.$$

$$g(x, y) \geq 0 \quad \int g(x, y) < \infty$$

Prop $G\phi = \int g(x,y) \phi(y) dy$ if, $\mathcal{E}_0 \rightarrow L^\infty \not\cong \mathbb{R}$
 $\phi \mapsto u$

$$\|\phi\|_0 := \sup \int g(x,y) |\phi(y)| dy$$

① $\Delta u + u = \phi \in \mathcal{E}_0$ $u = G(\phi)$

$$|u(x)| = \left| \int g(x,y) (\overbrace{\Delta u(y) + u(y)}^{\phi(y)}) dy \right|$$

$$|G(\phi)(x)| = \left| \int g(x,y) \phi(y) dy \right|$$

$g(x,y) > 0$
 $\in \mathcal{E}_0 \rightarrow \mathcal{E}_0$

$$\leq \int |g(x,y) \phi(y)| dy$$

$$\stackrel{\text{②}}{=} \int g(x,y) |\phi(y)| dy$$

||L[∞]|| の
 定義

$$\stackrel{\text{③}}{\leq} \sup_x \int g(x,y) |\phi(y)| dy =: \|\phi\|_0$$

$$\text{I. ii) } (\Delta+1)u \in H(\nu u, \nu u) = \phi \quad \dots \textcircled{\otimes}$$

また"は合解きたい方程式 $\textcircled{\otimes}$ を不動点 Σ 上の関数 u の間に考えたい。

$$(\Delta+1)u \in H(\nu u, \nu u) = \phi$$

$$\Downarrow$$

$$(\Delta+1)u = -H(\nu u, \nu u) + \phi$$

$$\Downarrow$$

$$G \circ (\Delta+1) = (\Delta+1) \circ G = \text{id.}$$

$$u = G(-H(\nu u, \nu u) + \phi)$$

従って,

$$\mathcal{F}_\phi : C^\infty(X, \mathbb{R}) \rightarrow C^\infty(X, \mathbb{R})$$

$$u \mapsto G(-H(\nu u, \nu u) + \phi)$$

任意 $u \in C^\infty(X, \mathbb{R})$, $\textcircled{\otimes} \Leftrightarrow u = \mathcal{F}_\phi(u)$ と f_2 。

$$\mathcal{T}_\phi : C^\infty(X, \mathbb{R}) \rightarrow C^\infty(X, \mathbb{R})$$

$$u \mapsto G(-\text{tr}(\nabla u, \nabla u) - \phi)$$

$$\textcircled{4} \Leftrightarrow \underline{u = \mathcal{T}_\phi(u)}$$

\mathcal{T}_ϕ の不動点を見つける問題になった!!

課題 Banach の縮小写像の原理を習せよ。

よす、 \mathcal{T}_ϕ が縮小写像になるように $\epsilon > 0$ を選んで見られるようにしたい。

Taubes $1/4$ の可成りとは、ここが証明になる。このスケールを説明する。

$\Delta = \sum -\partial_i^2$

$$\Delta |u|^2 = 2u(\Delta u) - 2|\nabla u|^2.$$

$\odot \Delta |u|^2 = -\sum \partial_i^2 u^2$

$$= -\sum \partial_i (2u \partial_i u)$$

$$= -\sum 2 \partial_i u \partial_i u + 2u \partial_i^2 u$$

$$= -2|\nabla u|^2 + 2u(\Delta u)$$

$\Delta = \Sigma - \partial_i^2$

$\Delta |u|^2 = 2u(\Delta u) - 2|\nabla u|^2.$

$$\begin{aligned}
 \Delta |u|^2 + |u|^2 &= 2u(\Delta u) + |u|^2 - 2|\nabla u|^2 \\
 &= 2(u(\Delta u) + |u|^2) \\
 &\quad \ominus |u|^2 \ominus 2|\nabla u|^2
 \end{aligned}$$

$$\therefore |\nabla u|^2 = \left[-\frac{1}{2} (\Delta |u|^2 + |u|^2) \right] - \frac{1}{2} |u|^2 + (u, \Delta u + u)$$

この項の処理が不明にならず。

$$\underbrace{|\nabla u|^2}_{\text{pink wavy}} = -\frac{1}{2} (\Delta |u|^2 + |u|^2) - \frac{1}{2} |u|^2 + (u, \Delta u + u)$$

$$\int g(x,y) |\nabla u|^2 dy$$

$$-\frac{1}{2} |u(x)|^2 \leq 0$$

$$= \underbrace{\int g(x,y) \left(-\frac{1}{2} (\Delta |u|^2 + |u|^2)\right) dy}_{\text{pink oval}} - \underbrace{\int g(x,y) \frac{|u|^2}{2} dy}_{\text{pink wavy}}$$

$$+ \int g(x,y) (u, \Delta u + u) dy.$$

$\nearrow \Delta$
 0
 $g(x,y) > 0.$

$$\leq \int g(x,y) (u, \Delta u + u) dy$$

$$\leq \|u\|_{L^\infty} \int g(x,y) |\Delta u + u| dy$$

$\leftarrow g(x,y) > 0.$

$$|\nabla u|^2 = -\frac{1}{2}(\Delta|u|^2 + |u|^2) - \frac{1}{2}(|u|^2 + (u, \Delta u + u))$$

$$\int g(x,y) |\nabla u|^2 dy \leq \|u\|_\infty \int g(x,y) |\Delta u + u| dy$$

$$\left(\left| u(x) \right| \leq \int g(x,y) |\Delta u + u| dy \right)$$

この情報を取り込めば、 $\|u\|_\infty \in C(\bar{\Omega})$ 。

$$\|u\|_0 := \sup_{x \in X} \int g(x,y) |u(y)| dy$$

$$\|u\|_{00} := \sup_{x \in X} |u(x)| + \sup_{x \in X} \sqrt{\int g(x,y) |\nabla u(y)|^2 dy}$$

$$C_{00} := \overline{C(X; \mathbb{R})}^{\|\cdot\|_{00}}$$

$$\int g(x,y) |\nabla u|^2 dy \leq \|u\|_{\infty} \int g(x,y) |\Delta u + u| dy.$$

$$\|u\|_0 := \sup_{x \in X} \int g(x,y) |u(y)| dy$$

$$\|u\|_{0,0} := \underbrace{\|u\|_{\infty}} + \underbrace{\sup_{x \in X} \sqrt{\int g(x,y) |\nabla u(y)|^2 dy}}$$

Prop $G: C^{\infty}(X; \mathbb{R}) \rightarrow C^{\infty}(X; \mathbb{R})$ は, \mathcal{E}_0 から $\mathcal{E}_{0,0}$ への
 有界 (非) 線形写像に拡張できる。

つまりは, $G: \mathcal{E}_0 \rightarrow \underline{\mathcal{L}^{\infty}}$ 有界線形写像。

\downarrow
 $\mathcal{E}_{0,0}$

① $\Delta u + u = \phi$ 在 Ω 上, $G(\phi) = u$ 且 $u \in C^2$.

$$u(x) = \int g(x,y) \phi(y) dy.$$

若 $u \in C^2$ 且 $u \in C^2$, $\|u\|_{\infty} \leq C \|\phi\|_0$ 且 $u \in C^2$.

$$\|u\|_{\infty} = \sup \sqrt{\int g(x,y) |\phi(y)|^2 dy}$$

• $|u(x)| = \left| \int g(x,y) \phi(y) dy \right| \leq \int_{g(x,y) > 0} g(x,y) |\phi(y)| dy \leq \|\phi\|_0$

• $\sqrt{\int g(x,y) |\phi(y)|^2 dy} \leq \sqrt{\|u\|_{\infty} \cdot \int g(x,y) |\phi(y)| dy}$

$$\leq \sqrt{\|u\|_{\infty} \cdot \|\phi\|_0}$$

$$\|u\|_{\infty} \leq \|\phi\|_0 \iff \sqrt{\|u\|_{\infty} \cdot \|\phi\|_0} \leq \sqrt{\|\phi\|_0^2} = \|\phi\|_0$$

次に, $\phi \in C_0^\infty$ とし, $\mathcal{F}_\phi: C_0^\infty \rightarrow \mathbb{R}^2$.

$$\mathcal{F}_\phi(u) = G(-H(\nabla u, \nabla u) + \phi).$$

$$\begin{aligned}\|\mathcal{F}_\phi(u)\|_{C_0} &= \|G(-H(\nabla u, \nabla u) + \phi)\|_{C_0} \quad G: C_0 \rightarrow C_0 \\ &\leq 2\| -H(\nabla u, \nabla u) + \phi \|_{C_0} \\ &\leq 2\|H(\nabla u, \nabla u)\|_{C_0} + 2\|\phi\|_{C_0}\end{aligned}$$

$$\leq 2\|u\|_{C_0}^2 + 2\|\phi\|_{C_0}$$

$$\begin{aligned}\|H(\nabla u, \nabla u)\|_{C_0} &= \sup \int g(x, y) |H(\nabla u, \nabla u)| dy \\ &\leq \sup \int g(x, y) |\nabla u|^2 dy \leq \|u\|_{C_0}^2\end{aligned}$$

とすると,

とすると,

つまり, $\|F_\phi(u)\|_{\infty} \leq 2 \|u\|_{\infty}^2 + 2 \|\phi\|_0$ (2.3).

課題

$$\|F_\phi(u_1) - F_\phi(u_2)\|_{\infty} \leq \frac{1}{4} \|u_1 + u_2\|_{\infty} \|u_1 - u_2\|_{\infty}$$

を示せ。

uはFφは連続関数

よって,

$$\underline{C_{00}} := \left\{ u \in C_{00} \mid \|u\|_{\infty} \leq \frac{1}{2} \cdot \frac{1}{4} \right\}$$

とすると,

Prop $\|\phi\|_0 < \frac{1}{4} \cdot \frac{1}{4}$ ならば,

• $F_\phi(\underline{C_{00}}) \subset \underline{C_{00}}$

• $\underline{C_{00}}$ 上で F_ϕ は連続関数

(証明は課題)

$$\text{I. iii) } \Delta u \in u \in H(\Omega u, \Omega u) + \underbrace{f(u)} = \phi$$

再び「不動点」を程す'

$$u = G_1 \left(\underbrace{-H(\Omega u, \Omega u)}_{\substack{!! \\ \exists \phi}} - f(u) + \phi \right)$$

にめきかえり。

$$\|G_1(f(u))\|_{\infty} \leq \underline{\underline{2}} \|f(u)\|_0$$

$$\|f(x)\|_0 = \sup \int g(x,y) |f(x)| dy$$

$$\leq \sup \int g(x,y) |f| |u| dy$$

$$\leq \|u\|_\infty \cdot \sup \int g(x,y) |f| dy$$

$$\leq \|u\|_\infty \cdot \|f\|_0$$

$$\leq \|u\|_\infty \cdot \|f\|_0$$

$$\|u\|_\infty$$

$$:= \|u\|_0$$

$$+ \sqrt{\sup \int g(x,y) |u|^2}$$

よ、こ、

$$\begin{aligned}\|F_\phi(u)\|_{00} &= \|G(-H(\partial u, \partial u) - f(u) + \phi)\|_{00} \\ &\leq 2\|H(\partial u, \partial u)\|_0 + 2\|f(u)\|_0 + \|\phi\|_0 \\ &\leq 2\|u\|_{00}^2 + 2\|f\|_0 \cdot \|u\|_{00} + \|\phi\|_0\end{aligned}$$

を得る。

課題 この ϵ の δ の 選択を せよ。

$$\begin{array}{c}\boxed{\epsilon} \\ \downarrow \\ \|F_{A_0}^+\|_0 \ll 1\end{array}$$

② 正則性について

$$\|u\|_{0,1} := \|u\|_{\infty} + \|\nabla u\|_{\infty}$$

$$= \|u\|_{\infty} + \sup \int g(x,y) |\nabla u|^2 + \|\nabla u\|_{\infty}$$

$$= (\|u\|_{\infty} + \|\nabla u\|_{\infty}) + \sup \int g(x,y) |\nabla u|^2 dy$$

この $\|\cdot\|_{0,1}$ による u と ∇g の評価と $\|\cdot\|_{\infty}$ で "Contraction" であることを見れば、 T_{ϕ} が $\|\cdot\|_{0,1}$ で "Contraction" になる。

課題：この T_{ϕ} の議論をよめよ。

II. 一般の E と A のとき,

E
↓ A
X

Kato's inequality

A: metric connection

$$\left(\stackrel{\text{def}}{\Rightarrow} \forall u, v \quad d(u, v) = (\nabla_A u, v) + (v, \nabla_A v) \right)$$

$$\forall u \in C^\infty(X; E) \quad |\nabla |u|| \leq |\nabla_A u|$$

$$\begin{aligned} \textcircled{!} \quad \nabla |u|^2 &= \nabla(u, u) = \underbrace{(\nabla_A u, u)}_{\substack{\uparrow \\ \text{metric connection}}} + (u, \nabla_A u) \\ &\parallel \\ &2|u| \cdot \nabla |u| \qquad \qquad \qquad 2(\nabla_A u, u) \end{aligned}$$

$$\therefore \underbrace{|2|u| \cdot \nabla |u||}_{2|u| \cdot |\nabla |u||} = \underbrace{|2(\nabla_A u, u)|}_{\text{Cauchy-Schwartz}} \leq 2|\nabla_A u| \cdot |u|$$

Kato's ineq

$A: \text{metric conn} \Rightarrow |\nabla|u| \leq |\nabla_A u|$

課題 $(|u|_\epsilon := \sqrt{|u|^2 + \epsilon} \in C^\infty(\Sigma, \mathbb{R}))$ $u=0$ の点 Σ 上では、

(注) 1) DK の p70 の (2.3.20) を見よ。

2) Kato's ineq は diamagnetic ineq
 と呼ばれた。
 (反磁性不等式)

3) refined Kato's ineq \rightarrow 「 ∇u の $\|\cdot\|$ 」

(注) $A: \text{ASD}, d_A^* u = 0 \Rightarrow |\nabla|u| \leq \sqrt{\frac{3}{4}} |\nabla_A u|$

↓ ← Uhlenbeck 特異点分解

4) Vafa-Witten ineq

これから使いたい不等式

• Kato inequality : $|\nabla|u|| \leq |\nabla_A u|$

• $\Delta|u|^2 = 2(u, \nabla_A^* \nabla_A u) - |\nabla_A u|^2$

• $\Delta|u|^2 = 2|u| \Delta|u| - 2|\nabla|u||^2$

定数"に"従って"証明"が"出"る。

(課題)

@ Kato's inequality の導出: $|G_A| \leq C G$

$$\begin{aligned} 2|u| \cdot \Delta|u| &= \underbrace{\Delta|u|^2} + 2|\nabla|u||^2 \\ &= 2(u, \nabla_A^* \nabla_A u) - 2|\nabla_A u|^2 + 2|\nabla|u||^2. \end{aligned}$$

$$\therefore \Delta|u| = \frac{(u, \nabla_A^* \nabla_A u)}{|u|} - \frac{|\nabla_A u|^2 - |\nabla|u||^2}{|u|}$$

$$\begin{aligned} \Delta|u| + |u| &= \frac{(u, \nabla_A^* \nabla_A u)}{|u|} + \frac{(u, u)}{|u|} - \frac{|\nabla_A u|^2 - |\nabla|u||^2}{|u|} \\ &= \left(\frac{u}{|u|}, \nabla_A^* \nabla_A u + u \right) - \frac{|\nabla_A u|^2 - |\nabla|u||^2}{|u|} \end{aligned}$$

$$\Delta|u| + |u| = \left(\frac{u}{|u|}, \nabla_A^* \nabla_A u + u \right) - \frac{|\nabla_A u|^2 - |\nabla|u||^2}{|u|}$$

Kato $|\nabla|u|| \leq |\nabla_A u|$

$$\Downarrow$$

$$0 \geq -(|\nabla_A u| - |\nabla|u||)$$

Ex 2. Kato inequality

$$\Delta|u| + |u| \leq \left(\frac{u}{|u|}, \nabla_A^* \nabla_A u + u \right)$$

$$\leq |\nabla_A^* \nabla_A u + u|$$

今から示す

$$\text{Kato inequality} \quad |\nabla|u|| \leq |\nabla_A u|$$

}

$$\Delta|u| + |u| \leq |\nabla_A^* \nabla_A u + u|.$$

Prop A : metric conn

$$\nabla_A^* \nabla_A \in | : C^\infty(X; E) \rightarrow C^\infty(X; E)$$

は、全射で単射でない。

(課題 2.4.1.1)

この逆写像を

$$G_A : C^\infty(X; E) \rightarrow C^\infty(X; E)$$

と置く。

def. $u \in C^\infty(X; E) \mapsto \Delta u$,

$$\|u\|_0 := \sup_{x \in X} \int_x \underbrace{g(x, y)} \cdot |u(y)| dy$$

関数に変わります

$$\Delta \in \mathcal{L}(C^\infty(X; \mathbb{R}) \rightarrow C^\infty(X; \mathbb{R}))$$

の Green 関数 \exists (そうですね!!)

$$\|u\|_{00} := \sup_{x \in X} |u(x)| + \sqrt{\int_x g(x, y) |\nabla_A u(y)| dy}$$

$$\mathcal{L}_0(X; E) := \overline{C^\infty(X; E)}^{\|\cdot\|_0} \quad \& \quad \mathcal{L}_{00}(X; E) := \overline{C^\infty(X; E)}^{\|\cdot\|_{00}}$$

Prop $G_A : C^\infty(X; E) \rightarrow C^\infty(X; E)$ is \mathcal{L}_0 on L^∞ (Kato's inequality!).

(:) $\nabla_A^* \nabla_A u + u = \phi$ (2.3), $\nabla_A^* u = \psi$, $u = G_A(\phi)$ (2.4).

Kato inequality (2.3),

$$\Delta|u| + |u| \leq |\nabla_A^* \nabla_A u + u| = |\phi|$$

for $u \geq 0$,

$$\int g(x, y) (\Delta|u| + |u|) dy \leq \int g(x, y) |\phi| dy$$

$$\| |u(x)| \|$$

$$\|\phi\|_0$$

So, $\|u\|_\infty \leq \|\phi\|_0$ (2.5), $\nabla_A^* u = \psi$, $\|G_A(\phi)\|_\infty \leq \|\phi\|_0$ (2.6)

(注) 今, $\|G_A(\phi)\|_\infty \leq \|\phi\|_0$ である。

$$\|G\|_{\ell_1 \rightarrow L^\infty} \leq 1$$

\uparrow
A-タスク!!

さらに、 $\| \cdot \|$ も L^2 の $\| \cdot \|$ である。

Prop

$G_A : C^\infty(X; E) \rightarrow C^\infty(X; E)$ は、

L^0 から L^∞ への有界線形写像に拡張できる。

$$\|u\|_0 := \sup \int g(x, y) |u(y)| dy$$

$$\|u\|_{00} := \|u\|_\infty + \sqrt{\sup \int g(x, y) |u(y)|^2 dy}$$

課題 : この Prop を示せ。

↓以後 $\mathbb{R}^n \cong \mathbb{R}^n$:

$$\nabla_A^* \nabla_A u + u + H(\nabla_A u, \nabla_A u) + f(u) = \phi$$

$$\underbrace{\nabla_A^* \nabla_A u + u}_{\text{}} = -H(\nabla_A u, \nabla_A u) - f(u) + \phi$$

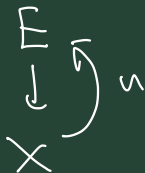
$$u = G_A(-H(\nabla_A u, \nabla_A u) - f(u) + \phi)$$

$$F_{A,\phi}(u) := G_A(-H(\nabla_A u, \nabla_A u) - f(u) + \phi)$$

$F_{A,\phi}$ は "Contraction" に なり 得る。
"Contraction" は $\| \cdot \|_{\infty}$ による (証明 ; 証明 略) である。

② まとめ

- 基本の Taubes ILL4



$$\|u\|_0 := \sup \int \underbrace{g(\alpha \cdot g)}_{\substack{\text{函数 } \alpha \in \mathbb{R}^2 \text{ の} \\ \text{Green 核}}} |u(y)| dy$$


- 仮定がきとき,

ASD 方程式などの "small solution" を (仮定とき,

和と積

- ① \mathbb{N}_A の P-ノリキリ評価がほぼ「自明」に出る。
- ② 接線が「あつてもなかつてもどーでもいー」な感じになる。
- ③ $\|F_{A_0}^+\|_0 \ll 1$ という条件は、「接線に関係なく、
「一本線」で「あつてもなかつてもどーでもいー」な感じになる」ともいえる。
- ④ Tambe's \mathcal{L}_L のものが、数値計算上では、
近似解を (与) れる。

$$\textcircled{1} \quad \int g(x,y) |u(y)| dy \leq \|u\|_{\infty} \cdot \int g(x,y) dy$$



 ∞

 $g(x,y) \sim \frac{1}{d(x,y)^{n-2}}$

τατα ε',

$$\|u\|_0 \leq C \cdot \|u\|_{\infty}$$

① $\notin \subset \notin$ $\text{val}(\text{supp}(u)) =: \nu \tau^a, \tau_2 \text{ とき}$,

$$\int g(x, y) |u(y)| dy$$

$$= \underbrace{\int_{d(x, y) \leq r}}_{\text{①}} + \underbrace{\int_{d(x, y) \geq r}}_{\text{②}}$$

$$\text{①} = \int_{d(x, y) \leq r} g(x, y) |u(y)| dy \leq \|u\|_{\infty} \cdot C \int_0^r \frac{1}{r^{n-2}} r^{n-1} dr = C \|u\| r^2$$

$$\text{②} = \int_{d(x, y) \geq r} g(x, y) |u(y)| dy \leq \frac{C}{r^2} \int_X |u| dy \leq \frac{C}{r^2} \|u\|_{\infty} \cdot \nu$$

Let z , $v := \text{val}(\text{supp}(u)) \in \mathbb{R}$.

$$\int g(x, y) |u(y)| dy \leq C \|u\|_{\infty} \left(r^2 + \frac{v}{r^2} \right)$$

Let z'' , $r := v^{\frac{1}{4}} \in \mathbb{R}^+$,

$$\leq C \|u\|_{\infty} \sqrt{v}$$

Let z , $\mathbb{F} \in \mathbb{C}^*$,

$$\int g(x, y) |u(y)| dy \leq C \|u\|_{\infty} \sqrt{\text{val}(u)}.$$

$$\textcircled{1} \int g(x, y) |u(y)| dy \leq C \|u\|_\infty$$

$$\textcircled{2} \int g(x, y) |u(y)| dy \leq C \|u\|_\infty \sqrt{\text{vol}(V)}.$$

for,

$$u = u_1 + u_2$$

u_1 : small L^∞ norm

u_2 : small support

$a \in \mathbb{R}$,

$$\|u\|_0 \leq C \|u_1\|_\infty + C \|u_2\|_\infty \sqrt{\text{vol}(\text{supp}(u_2))}$$

for?

② 今までのモロンのバリエーション

① 右逆をばう。

利点. $\|\cdot\|_{\infty}$ を導入する必要がある

$$\nabla_A^* \nabla_A u + u + H(\nabla_A u, \nabla_A u) + f(u) = \phi$$

$$\Downarrow u = G_A(\eta) \quad \nabla_A^* \nabla_A u + u = \eta$$

$$\eta + H(\nabla_A(G_A \eta), \nabla_A(G_A \eta)) + f(G_A \eta) = \phi$$

\Downarrow

$$\eta = -H(\nabla_A(G_A \eta), \nabla_A(G_A \eta)) - f(G_A \eta) + \phi$$

$$\int |\nabla_A u|^2 g(x, y) \leq \int g(x, y) (u, \eta)$$

$$\underbrace{\int |\nabla_A(G_A \eta)|^2}_{\|\cdot\|_{\infty}} \leq \|u\|_{\infty} \cdot \|\eta\|_{\infty} \leq \|\eta\|_0^2$$

② $d_A^+ d_A^*$ とその共役 $d_A^* d_A^+$ と共に F_A^+ を使う。

\rightsquigarrow 倉西写像との相性もいえる。

$$d_{A_0}^+ d_{A_0}^* u + (d_{A_1}^* u \wedge d_{A_1}^* u) + F_{A_1}^+ = 0$$

$$u = - (d_{A_0}^+ d_{A_1}^*)^{-1} (F_{A_1}^+ + (d_{A_1}^* u \wedge d_{A_1}^* u)^+)$$

③ $\exists \Gamma \ni \Gamma \circ \Gamma = a$ とする。

② $\forall \mathbb{R} \exists > \wedge \forall \top a$ とき,

$$X = \mathbb{S}^3 \times \mathbb{R}$$

$$\left(\frac{s}{r} - w^t\right) = \frac{1}{2}$$

$$\Delta_y g(x, y) + g(x, y) = \delta_x(g)$$

Prop $\exists C > 0 \quad \forall x, y \in X$

$$d(x, y) \geq 1 \implies (0 <) g(x, y) \leq C e^{-d(x, y)}$$

①

$S^3 \sim \mathbb{R}$ $x_0 = (\theta_0, 0)$

$$C := \sup_{\substack{|t|=1 \\ \theta \in S^3}} g(x_0, (\theta, t))$$

$$u(\theta, t) := C e^{C(1-|t|)} - g(x_0, (\theta, t)) \quad \text{Eqs.}$$

$$u|_{t=\pm 1} \geq 0$$

$$(\Delta + 1)u = 0$$

$$\} \implies u \geq 0.$$

弱极大原理 (GT Chapter 3 section 1)

② $S^3 \approx \mathbb{R}$ 上の T -スベクトルの無限小の表現の求め方.

BPST T -スベクトル on \mathbb{R}^4

$$\begin{aligned} A(x) = \frac{1}{1+|x|^2} & \left\{ \begin{pmatrix} \sqrt{-1} & 0 \\ 0 & -\sqrt{-1} \end{pmatrix} (x_1 dx_2 - x_2 dx_1 \right. \\ & \left. - x_3 dx_4 + x_4 dx_3) \right. \\ & + \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ -1 & 0 \end{pmatrix} (x_1 dx_3 - x_3 dx_4 + x_2 dx_4 \\ & \left. - x_4 dx_2) \right. \\ & \left. - \begin{pmatrix} 0 & \sqrt{-1} \\ \sqrt{-1} & 0 \end{pmatrix} (x_1 dx_4 - x_4 dx_1 \right. \\ & \left. - x_2 dx_3 + x_3 dx_2) \right\} \end{aligned}$$

共形変換 $\mathbb{S}^3 \times \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}^4 - \{0\}$ ($= \mathbb{I}^4$),
 $(\theta, t) \mapsto e^t \theta$

BPST 1-2 節より Σ を与えた θ の Σ ,

I

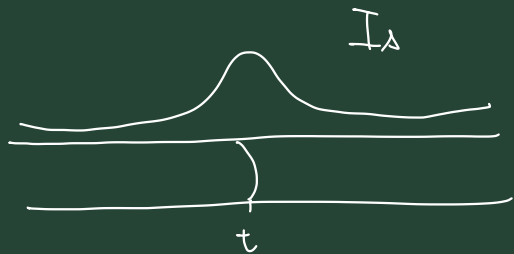
と \mathbb{I}^3 。

$$|F(I)|(\theta, t) = \frac{4}{(e^t + e^{-t})^2}, \quad F^*(I) = 0$$



$$\frac{1}{4\pi^2} \int |F(I)|^2 = 1$$

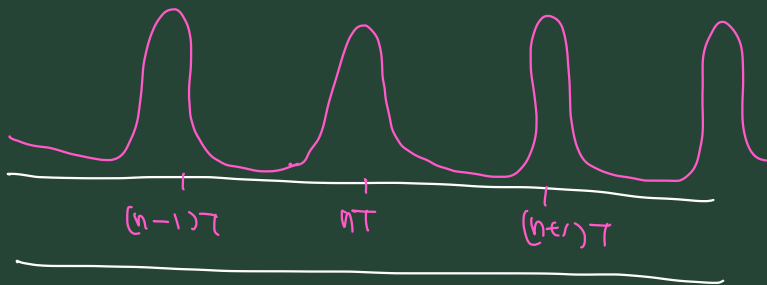
Iの平均移動

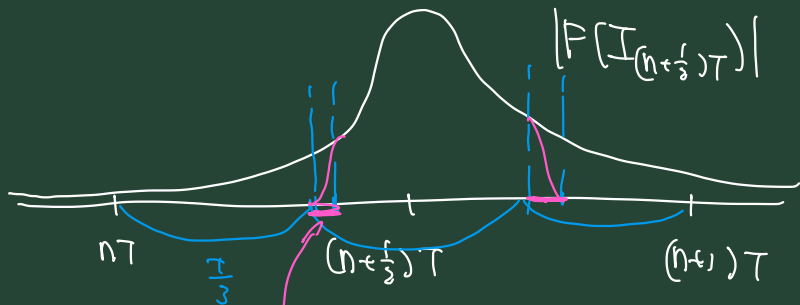


$T \gg 0$ に對して,

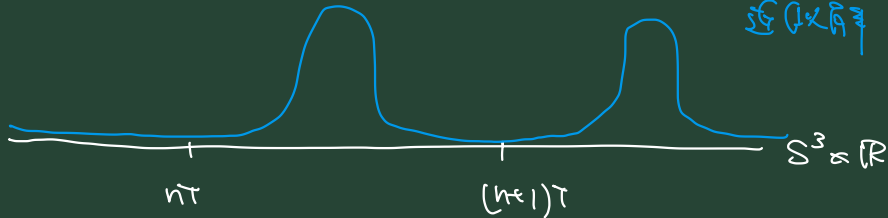
$$\left\{ I_n\left(\tau + \frac{1}{2}\right) \right\}_{n \in \mathbb{Z}}$$

を一點に點子。





cut off 函数で「切り」。



② 他に読んだからたこと

- Green 様の $\mathbb{C}P^2$ \rightsquigarrow [Aubin]
- 倉西 字塚. (obstruction の 見つけ方)

[Fluen - Weinstein]

零点の見つけ方

- Euler 数の $\mathbb{C}P^2$
- $\mathbb{C}P^2$ の 不変点定理

中間値の定理

- ∫: Lypovunov - Schmidt reduction
- balancing condition

• underdetermined system

① scalar curvature

• 他の見方での法